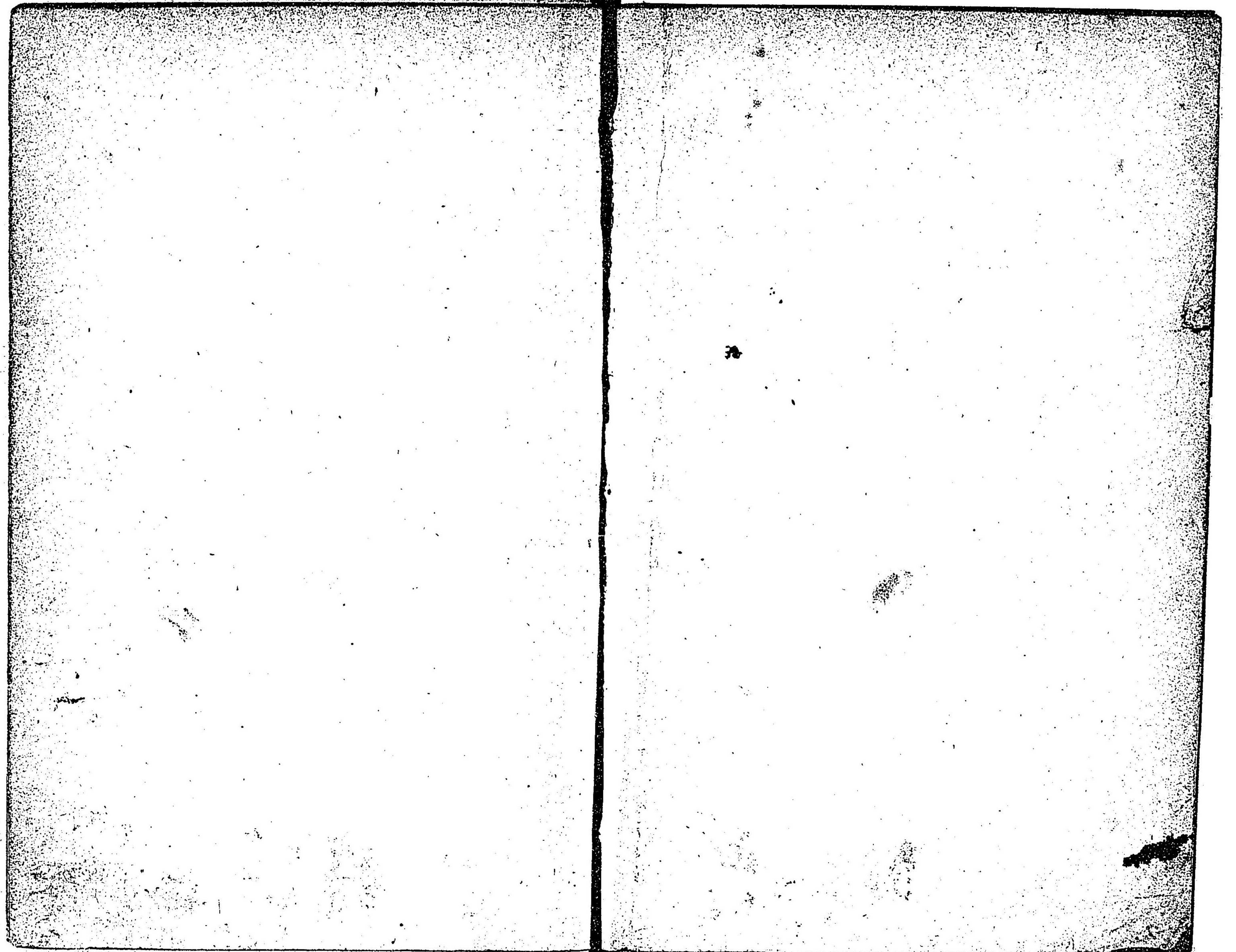


1525  
1517

基督  
信徒  
悟道錄





神學博士 ルイ・アルバート・バンクス原著

文學士 小原 要逸 譯述

基督教徒 悟 道 錄

東京 内外出版協會

明治 45. 6. 13 内交

基督教悟道錄

目次

|            |    |
|------------|----|
| 靈と肉        | 一頁 |
| 個性         | 二  |
| 靈魂と樂器      | 三  |
| 大空印刷       | 五  |
| モルトルケ將軍の用意 | 七  |
| 生命の樹       | 一〇 |
| 魂の眞珠       | 一一 |
| 母の愛        | 一二 |

二

|          |    |
|----------|----|
| 微笑の力     | 一三 |
| 生命の水     | 一五 |
| 死に行く魂    | 一七 |
| 感謝と愛情    | 一九 |
| 一砂粒の罪過   | 二一 |
| 確かなる錨    | 二二 |
| 救命綱      | 二四 |
| 法衣の盜賊    | 二五 |
| 黙々の豫言    | 二六 |
| 悪魔に抗せよ   | 二八 |
| 千辛萬苦の結果  | 三〇 |
| 自ら救ひ得ざりき | 三一 |

三

|        |    |
|--------|----|
| 野徑の骸骨  | 三二 |
| 精神と行爲  | 三三 |
| 劍魚の悔   | 三四 |
| 愛の指環   | 三六 |
| 皇帝と馭者  | 三八 |
| 天樂の妙音  | 四〇 |
| 籠中の頭   | 四一 |
| 噬臍の歎   | 四二 |
| 傳書鳩    | 四四 |
| 愛と氷山   | 四五 |
| 小事を蔑むな | 四七 |
| 献身     | 四九 |

四

さまよへる者……………五五

最大の金坑……………五八

雁と箭……………五九

黒鐵の鎖……………六一

徒消する物無し……………六二

心の深さ……………六四

家寶と屑屋……………六六

樹上の氷環……………六八

天の窖……………六九

獅々と猫……………七〇

心靈上の外科手術……………七二

比公と虞氏……………七四

土中の砲艦……………七五

富豪の失明……………七七

靈的財源……………七九

救濟の籠……………八二

小兒の知覺……………八三

未來の友……………八五

那翁と堇花……………八八

雪下の花……………八九

缺く可からざる人……………九〇

黄金の墓……………九二

耳を開け……………九四

猫と水……………九五

五

基督の知己……………九六

黄金の色……………九八

北極の花……………一〇〇

背教者の愁……………一〇二

十字の御旗……………一〇三

醉へる蜂……………一〇四

基督教的生活の香……………一〇六

切花と性格……………一〇八

小兒と獅子……………一〇九

難破船……………一一〇

人生の潮流……………一一二

眞の禮讓……………一一三

蛾と罪……………一一五

勇敢なる巡查……………一一六

凍らぬ泉……………一一九

グラッドストーンの勇氣……………一二〇

習慣の力……………一二一

愛の爲に……………一二三

人格の尊嚴……………一二四

俗世の財寶……………一二七

渴土の悲劇……………一二八

自縄自縛……………一三〇

人生の雪……………一三一

先縦の力……………一三三

八

|          |     |
|----------|-----|
| 生中の死     | 一三四 |
| 悪魔の電線    | 一三六 |
| 好機を逸する勿れ | 一三八 |
| 最深の井戸    | 一四〇 |
| 溜池と清流    | 一四一 |
| 人生の渦巻    | 一四三 |
| 小狐       | 一四四 |
| 逆立の珍木    | 一四六 |
| 富何かあらん   | 一四八 |
| 母國語の忘却   | 一五〇 |
| 火の心      | 一五一 |
| 四海兄弟     | 一五三 |

|         |     |
|---------|-----|
| 天來の使命   | 一五五 |
| 神聖美     | 一五六 |
| 臨終の決算   | 一五八 |
| 状と對     | 一五九 |
| 罪の火     | 一六一 |
| 没我の力    | 一六二 |
| 近世文明の協力 | 一六五 |
| 胡椒と忍耐   | 一六八 |
| 天の鍊金家   | 一六九 |
| 浮浪人の訓言  | 一七〇 |
| 心の開拓    | 一七三 |
| 雲雀の歌    | 一七四 |



|        |     |
|--------|-----|
| 鰻と列車   | 二七六 |
| 情熱     | 一七八 |
| 少者を衛れ  | 一八〇 |
| 基督教的剛勇 | 一八一 |
| 迷へる者   | 一八三 |
| 透明なる魂  | 一八四 |
| 蛇の洞穴   | 一八六 |
| 心の糧    | 一八八 |
| 愛と譽    | 一八九 |
| 神の玉篋   | 一九二 |
| 玉の大野   | 一九三 |
| 中毒の習慣  | 一九四 |

|           |     |
|-----------|-----|
| 腐れた林檎     | 一九七 |
| 皇太子の御助    | 一九八 |
| 雪裡の死屍     | 二〇〇 |
| 金鑛        | 二〇一 |
| 氷山と教會     | 二〇三 |
| 一粒の種子     | 二〇五 |
| 最善のものを與へよ | 二〇七 |
| 北光        | 二一一 |
| 歸るは誰      | 二二三 |
| 吾人の理想     | 二二五 |
| 最美の玉      | 二二六 |
| 紙幣の血痕     | 二二八 |

|        |     |
|--------|-----|
| 昆虫の耳   | 二二〇 |
| 火止の火   | 二二一 |
| 精神的霧浪  | 二二三 |
| 鋭敏なる嗅覺 | 二三四 |
| 啄木鳥の勤勉 | 二二六 |
| 雷の鑛脈   | 二二七 |
| 無窮の瀆   | 二二九 |
| 精神寫眞   | 二三〇 |
| 罪惡の捕虜  | 二三二 |
| 解毒藥の靈驗 | 二三四 |
| 浪漫的報酬  | 二三六 |
| 光と影    | 二三八 |

|       |     |
|-------|-----|
| 大磁石   | 二四〇 |
| 惡魔花の村 | 二四一 |
| 敵前の平和 | 二四三 |
| 窓裡の光  | 二四五 |

# 基督教徒悟道錄

## 靈と肉

北米西部聯邦の一州から選出せられた或る國會議員が、農務省から球莖其の他種々の草花の種子の分與を受けたので、早速之を自己の選舉區民に分配した。種子には大抵夫々手紙が附いて居たので、此は何彼は何と云ふ具合に知られたのであるが、早吞込を爲勝ちの人だと、種子の分與後別に何の通知も受けなかつたと爲たら、随分滑稽な間違も爲たことであらうが、其は兎に角、此處に一口噺にでも有りさうな可笑しな感違ひを爲た者が有る。或る文士の妻君で百合根の若干を受取

二  
ツた者が早速御禮をとでも言ツたのであらう。文士は謝辭を述べて、『御親切にも佳菜を御惠送下されたる段、鳴謝致します。彼の玉葱は格別に結構で、ビーフステーキに取副へ、舌鼓を打ツて賞味致しました。』

と斯う言ツたのである。

○是は眞に一場の笑事に過ぎないけれども、退いて一考すると痛恨に堪へざる事實である。世人は滔々相背いて、楚々たる花を着け、郁々たる香を放つ可き百合根を食ひ去つて、高潔なる人生の美しい約束をも片端から犠牲にして、口腹の慾をのみ維満たさうと爲るではないか。

## 個性

何人と雖も、他人の職務を果たすことは出来ないのである。人は各個神の御手に成ツた特殊の製作である。バーモントのアルフレッド・ジエー・ハウは、此の邊の消息を歌ツて斯う言ツて居る。

『神が爾に命じ給へる其の歌を歌へよ。』

世の大衆の心は、

其の圓滿なる慰安の爲に、

爾が歌ふ樂の音を要するなり。』

○眞に歌ひ盡して餘蘊なきに庶幾いと謂ふことが出来るではないか。

## 靈魂と樂器

大聲樂家の吟唱を毎々傾聴して居られる方々でも、世間一般の聲樂

家が食忌<sup>しきい</sup>みと云ふ事を懸命に服膺して居ると云ふことを知ッて居られる人は、極々尠<sup>すく</sup>なからうと思ふ。メルバは、糖菓が非常に好きで有つた。けれども、少許<sup>すく</sup>でも食つたことは無かつた。如何<sup>どん</sup>な甘さうな物が獻立に載ッて居ても、聲を害する憂の有る物なら、自ら抑へて、決して口にしたことが無かつたのである。獨逸の或る有名な聲樂家は、朝夕演奏後に夫に伴はれてレストラントに出入したので、始終烟草の煙を吸收することが多く、到頭樂音を發し得なくなつたのである。

○聲樂家が聲を害<sup>そこな</sup>ふまいと、一生懸命に飲食物にまで注意すると云ふ事は、心靈の調和を維持せんが爲には、更に一層の用心を要するものであると云ふ事を想起せしめる。人の靈魂は、最微最妙な樂器の如きものである。苟も惡影響を及ぼすものは、悉く之を遠ざけなければならぬと云ふ事に留意しなければ、愛情、希望、信念

の聲音を發しやうと欲しても、發することが出来なくなるのである。聲樂家の口にする食物なり、吸收する空氣なりが、直に其の聲の上に善惡の影響を及ぼすやうに、吾人の繙讀する書冊新聞、吾人の耽り勝ちの談話、吾人の爲す思索默想は、悉く心靈の調不調を惹き起すのであるから、其の取捨選擇を等閑に附する譯にはゆかないのである。

## 大空印刷

シンシナチの或る人が、火の文字で、大空高く報道なり布告なりを刷り出す用に供する機械を發明した。電氣應用の機械である。先づ電氣仕掛の暗箱<sup>カブラ</sup>で、布告なり通信なりに要するだけの大きさの映布代りの影を天上に寫し出して、次に他の暗箱で、其の表面に火文字を映寫し

やうと爲るのである。まア言ッて見れば、發明者の夢に過ぎないが、其の想像する所に従へば、日々の緊要なる報道が、毎夕空中に大きく映寫されて、一日の勞作を終へた者も、樂々と天を仰いで氣儘に其の報道を讀み得る便益が有ると共に、此等の報道なり布告なりが、公平賢明方正なる民選の役人の司る所と爲ると、淺識誤報、偏見等をも防止することが出来るのであるから、結局斯くの如き大空印刷を必要とする時代が當然來るであらうと云ふのである。

○此の發明の結果が果して如何なるものか、其は暫く別問題として、次のやうな發明が、人類あつて以來、古くから在ると云ふことは、吾人も知ッて居る。即ち、天地開闢の切初はじめから今日に至るまで、刻々の出來事は、總て上天の記録に載せられ來つたのであると云ふ事を指すのである。エスは、弟子達が惡魔も尙ほ自分等には隸屬

して居るのであると云ふ事を喜んで居た時に、弟子達に向ッて、彼等の名が悉く天に記し留められて在るが故に喜ぶと云ふ方が更に適切であらうと告げ給うたのである。吾人も、胸に、基督の精神を有ッてさへ居れば、吾人の名は天に記し留めらるゝのであると云ふ事を知ッて居なければならぬ。保羅パウロは、吾人若し基督の精神を體して居なければ、基督の何でも無い、と宣言して居ることも併せて知ッて居なければならぬ。

### モルトケ將軍の用意

佛蘭西が一千八百七十年に宣戰を公布した時、フアン・モルトケ將軍は、夜中に眼を覺して、うん其の通りだと言つた相である。そして、將軍は落ちつき拂ッて冷然として、自分を起した役人に向ッて、

八  
『一番の小閣に行ッて、余の金庫の中にある紙を出して、帝國の各軍隊に宛てゝある通りに、直夫々電報を打て。』

と命じた。命すると齊しく又寢反り打ッて、眠り込んで了ッて、翌朝平生の時間と變りなく目を覺した。伯林では誰も彼も猫も杓子もと云ふ具合に皆騒ぎ立ッて居るのに、モルトケ將軍は相も變らず悠然として朝の散歩に出掛けた。すると、將軍に遭ッた友人は、直に聲を懸けて、『將軍、足下は此の大事件を意にも介して居ない様ですね。今日の地位が心配で無いのですか。僕は、定めし足下は大多忙を極めて居られる事であらうと思ッて居ました。』

と言ふと、將軍は、

『あゝ此の度の事件に就いて僕の盡す可き職務は、遠の昔に済まして置いたので、今更爲す可き事は無いのである。』

と答へた。

○さう云ふ風に、神と人とに對して爲るのが、吾等の義務である。吾等の救主は、如何な變事が起らうも知れないのであるから、其れに對して平生用意して居なければならぬと云ふ事を説いて居られる。吾等が生前に改めなければならぬと思ふ事を、何でも延引して置く程愚な事は無いのである。若し、何時までも爲て置かなければならぬといふ様な事が有るなら、直に其れを爲なければならぬ。萬事に夫れ相應の用意が爲て有ると云ふ自覺は、吾等が事を爲す上に一倍の勇氣を與ふると共に、未來に關しても、平然たる心持を以て之に對することが出来るやうに爲て呉れるのである。

## 生命の樹

ジャマイカに、生命の樹と呼ばれて居る奇妙な樹がある。何故生命の樹と呼ばれて居るか云ふと、殆んど如何なる方法に依るも、其の一部をさへ殺すことが出来ないからである。其の葉を摘いで糸に吊すと、他の植物の葉のやうに萎びたり枯れたり爲ないで、白い糸のやうな根を出して、空中から水分を吸収し、新しい葉を生じ始めるのである。

○基督教は、道德界精神界の生命の樹である。聖書の中の何處の零碎な部分でも可いから、投げ出して見よ。人類の愛情なり希望なりの中に根を張って、生命の蔓を出すであらう。そして亞弗利加の炎熱の中でも、北極の氷雪の間でも、何處の地でも、如何なる異

教でも、殺すことの出来ない生活力を有って居るのである。

## 魂の眞珠

ニュー・ヨーク州の其處此處及び南方到る處の河湖で眞珠が発見せられた結果、眞珠が如何にして出来るかと云ふ事が解るやうに爲った。清水に棲んで居る蛤が、食餌と一緒に一粒の砂を吸ひ込む。すると、蛤は九箇月毎に乳のやうな分泌物を出して、殻の内部に在る眞珠母の新しい蓋被を造る。白いこともある、青いこともある、又石竹色のこともある。此の如き物質の蓋被が、蛤の内部に入り込んで居て、断えざる苦惱の種子を爲して、筈の砂の周圍に出来て、かくて段々時の経過すると共に、眞珠が出来上るのである。

○其れと同じく、魂の眞珠も、人を試さうとする諸々の事情境遇の



下に在ッて、克く堪へ、克く忍ぶと、終に立派に出来上るのである。

## 母の愛

一 讀人をして惻然たらしむる記事が、ニューヨーク市の或る新聞に掲載せられたことが有る。其れは、母親の愛情の至高なる方に、關するものである。

或る薄命の婦人が、精神の平衡を失ッて、遂に家をも棄て、友をも棄て、飛び出して、了ッたのである。が、一人の才人が一策を案出して、其の婦人に宛て、其の愛兒が今市立病院に在ッて、生命危篤であると云ふ電報を打ッた。處が、其の策が奇功を奏して、婦人は甘々と病院におびき込まれて、いざ愛兒に會はうと爲た處を抑へて、精神病患者の檻室に收容したのである。憫む可き彼女の頭腦は、一人前の働きを爲ること

が出来ない、普通の通知では別段何の感も受けなかつた位、狂ッて居たのであつた。にも拘はらず、子に對する母としての愛情は、疾病よりも強くて、暫時の間ながら、其の熱病的の亂心をも沈靜したのである。

○ 嗚呼、母が其の兒を忘るゝことは有ッても、天父は彼に歸依する者を忘れ給ふことは斷じて無い、と宣うた神の御言の、其の約束より強いものが又と有らうか。

## 微笑の力

亞米利加植民地の出来初めの頃、國境に近く住まッて居た一人の紳士が、友人達と狩獵に出掛けた事があつた。ところが、友人とはぐれて了ッて、到頭道に迷ッた。初來た道に出やう出やうと焦心れば焦心る程、益々人氣も無い奥山に入ッて行くばかりで、最後のつまりが方角さへ

知れない深い森の中で、日が暮れて了った。疲れ切つて居たので、木の下に身を横たへてぐっすり睡込んだ。朝になつて、誰とも知れず自分を見詰めて居るやうな、何とも知れない氣味悪い心持がしたので、愕然として目を覺すと、豈測らんや身は既に敵意を抱ける印度人に取圍まれて居て、戦色を施し羽飾を著けて居る一隊の首領が、満面に苦々しげな嫌悪の色を漲らして、自分の上に乗り掛からんばかりに爲て居たので有った。紳士は今や絶體絶命危難は身の上にと見取つた。が其れを避く可き手段もなく、其の上土人の言語と云つては一言半句も知つて居なかつたのである。けれども、狼狽へて本心を失ふやうな事はなく、生れたながら天から授けられて居る彼の人類全體に通ずる普遍の言語を知つて居たので、如何に戦色を施し羽飾を著けて居ても、印度人も同じく是れ人であると云ふ事を信じた。紳士は清朗した眼を印

度人に注いで、——莞爾した。すると、上から窺いて居る土人の眼の瘳猛なる色は、段々に消えて行つて、終には莞爾な微笑さへ其の顔面に表はれたのである。

○然り、二人は共に人であつた。二人は兄弟であつた。斯くて、紳士は救はれたのである。そして、蠻人は、彼を自己の保護の下に、屋舎に連れ歸り、數日の後、友人達の處に送り還した。畢竟、衷心からの微笑が生命を救つたのである。

## 生命の水

基督信徒の一生は、生命の泉が永しへに湧き出で、希望の根を養ひ、老衰の勢力を物とも爲ないのであるから、常緑の色を失はない。基督の泉を心に深く藏して居る者は、常に一生を清新にして常緑なるもの

と望見し得るのである。

近く中部濠洲<sup>オウストラリア</sup>を旅行した者の談に據ると、何が不思議と言ッても、其の地方一帶の乾燥季と濕潤季との對照<sup>コントラスト</sup>ほど驚く可きものは無いとの事である。乾燥季だと、一哩行ッても二哩行ッても、荒涼たる石原に過ぎないで、植物らしいものも動物らしいものも殆んど目に入らない。太陽は、炎威を逞しうして、褐色の石、紫色の巖のみの廣野を射て、人をして眩暈を感せしめる位である。ところが一度雨が降り始めると、數時間以内に滿眸の光景を一變する。水は、乾き切ッて堅くなッて居た土地を濕し、無數の動物が出て来る。窪地や水溜は、蛙の閣々たる聲喧しく、甲殼類は如何かすると何箇月と云ふ長い間乾いた土地の上に在ッた其の卵から不思議な程の速力で孵化し、泥に埋ッて居た軟體動物も甦<sup>よみがへ</sup>ッたやうに生氣づき、有らゆる水陸の住者は、其の短生涯を最も有効

に稼<sup>かせ</sup>がうと爲<sup>し</sup>始める。土地は、一日か二日のうちに、急速に生ずる無數の實生物の葉で蒼々として来る。鳥は、魔術の力が出て来るのかと思はれる程、彼處<sup>かしこ</sup>からも此處<sup>こゝ</sup>からも現はれて来る。そして、嘗て乾燥寂寥であつた一帶の土地は、生氣鮮々たる色彩で飾られて居る花葉禽獸蟲魚で、忽ち其の景趣を一變するのである。

### 死に行く魂

大きくも無い彼のブロンクス河で、慘憺極まる悲劇が演せられた事がある。流も狭く水も早くないのに、如何したはずみか、二人の男が河に落<sup>お</sup>ッた。が、四周には燒でも達<sup>と</sup>く位の距離に遊山舟が大分居<sup>あ</sup>ッた。で、一人の方は其れに泳ぎ附かうと力<sup>ちから</sup>めた。處が、いま一人の方は溺れる者がよく行るやうに、死んでも離さないと言はぬばかりに抱<sup>か</sup>み付い

たのである。會男女二人が乗ッて居た小舟が助け上げることの出来る位の處に在ッた。舟の中の男は、二人の傍に舟を寄せて、曳き上げて遣らうと思ッて立ッた。すると、女は前後の分別もなくなッたものか、金切聲を振り立て、

『近寄ッてはいけません。顛覆されますよ。』

と叫んだが、男は、そらッとはかりに片手を差出すと、女はいきなり飛び付いて、方の限り其の兩手を引戻して動かさばこそ。男は、振り離さうと切りに腕いたけれども、女の方は自分一個の危険ばかりを思ッて他を思はず、確乎とぶら下ッた。其の中に溺れて居た二人は、沈んで了ッたのである。

○世には誘惑に陥ッて罪惡を犯した人の魂が、手を出して遣れば遠く位の處で、將に死なんとして居るのに、自己一身の平和と愉快

とを害ふの邊はないと言ッて、其の魂が危険どころか、復た如何とも爲し難い、破滅に沈んで行くのを對岸火視する基督信者が、甚だ多いやうである。此の如き基督信者の不注意と利己心とに因ッて、上に述べたやうな寒心す可き悲劇が、わけなく二倍にも三倍にも爲らるゝのである。愛ふ可きではないか。

### 感謝と愛情

ニュー・ヨーク市で面白いそして意味深い事があッた。と言ふのは、一人の紳士がエクイテール・ビルディングの控室に立ッて居て、偶然床の上の紙片を見付けた。取り上げると齊しく、呀とばかりに仰天した。其は、額面一萬八千弗餘の寄託金證書であッたのである。

『誰か知らんが、定めし心配して狂亂の體を爲て居るに違ひない。』

と思つて、大骨折つて友達中に告げ知らした。すれば、其の拾つたと云ふ話が一番手早く遺失者にも達くだらうと考へたからであつた。果して間もなく、其の紳士の事務所に一人の小男が大急ぎでやつて来た。紳士は、拾ひ取つた證書を手渡しながら、大喜びで感謝することだらうと豫想しながら微笑して居た。すると、それ處か、驚く可し、其の小男は、『何故貴方は、これを銀行へ持つて行かなかつたのです。お蔭で大面倒を見ました。』と怒鳴りつけたのである。

○要するに、此の如きは、吾等大多數の人が、神を遇する行方である。吾等は兎角此の如き精神を以て、有らゆる人生の恩恵を受けたがるのである。そして、感謝の念が湧然として吾等の胸裡に起り、感謝の語が吾等の唇上に上るのは、吾等に對する神の個人的愛情を

理解し得た時のみである。豈自ら省みて、疚しく思はない者があらうか。

### 一砂粒の罪過

クリーヴランドで、給水工事の隧道内に爆發が起つた結果、目もあてられない澤山の死傷者を出したことがある。一人の頓馬な子供が朝の中にとぼつて了つた白熱燈を午頃使へるやうに爲て置けと命けられたので、皆が晝飯を食つてる間に、新しい球と鎔解線とを持つて来て針金に案排しようとして爲たのである。ところが、一粒の砂が球の受器に入つて居たので、甘くはまつたと思ふが早い、此の芥子粒ほどの小さな砂が火花を發したので、始終隧道内に一杯になつて居る瓦斯が、忽ち爆發したのである。其の爲に、七人は即死、負傷者も頗る多く、損失は大

變な高に上った。然るに、其の原因はと言ふと、唯一粒の砂に過ぎなかつたのである。

○一寸した罪過だから、小さな罪過だからなどと心を許すな。危険千萬な砂粒の悪事が火花を發して、爆發を起し、遂に一生をして悲痛悔恨止むなからしむるのである。

### 確かなる錨

ポールの海洋紀行記には、面白い譚が随分澤山ある。中に闇夜に舟人が四個の錨をおろして夜の明けるのを待ったと云ふ條がある。吾等にも、常に心頼に爲可き錨があるのである。ソシントン・グラッツンの吟に成る小詩「間遠なきものは、特に異彩を放って居る。茲に其の四節だけを引用して置く。

「信仰のおろし、錨の

風濤の裡に断えざる限り

吾は、心靜に

確なる物に懸り居るなり。

吾は知る、正の、正なるを、

詐の、善からざるを、

愛は、憎より、

隣人は、間牒より善きを。

\* \* \* \* \*

黑白も分かぬ夜に

星の光の痕なき時、

勇氣の恐怖より善きを、

信の疑より真なるを。

悪魔威を逞しうして戦ふとも、

天使長く姿を隠すとも、

吾は知る真と正とは、

宇宙を味方に有てるを。』

### 救命網

アトラクタの出来たばかりの家の九階から墜ちた人が不思議な指  
子で生命拾ひを爲たことがある。其の落ちた人は、宙を切つて墜ちて  
来る途中網が手に觸つたので、いきなり水に溺つた人が繩にすがつて

離さないやうな馬鹿力を出して、之を引捉へた。こんな風で、其の男は、  
網に取捉まつた儘曳き上げられて、幸にも九死に一生を全うしたので  
あるが、抑も其の網と云ふのは、仕事師が建築材料を上げる目的で、据ゑ  
付けた下の機關から引かれて居つたものである。

○墜ちて居る人に助命網を投げて遣ふことは、基督教會の使命で  
ある。吾人は、人の最後の機會が果して何時であるか、其れを知つ  
て居ないのであるから、罪人には、希望と云ふ救命網を捉へるだけ  
の機會を與へることを忘れてはならないのである。

### 法衣の盜賊

ブルックリンの天主教會堂が、類の無い手段で、街中の人の見て居る  
前で、盜難に罹つた事がある。盜賊共は、教會堂の裏の方から入つて、白

法衣を着込み、大膽にも聖房内に燈明を點火けて、悠々と仕事を始めた。街の人は、之を見て居たけれども、僧侶達が何か儀式を爲て居るのだと想つて了つたのである。

○此の話は、基督教職の法衣が、如何かすると、己の貪婪飽くなきの心を掩ひ隠さんが爲のみに、豺狼の纏ふ所と爲ると云ふ證據である。苟くも人たる者は、唯一錢でも、通用しなければ、擬造しないのである。

### 黙々の豫言

多数の青年は、其の能なり才なり將た機なりを享有するに當つて、黙して語らざる大豫言を有する。敢て黙して語らざると言ふのは、彼等が之を讀取するの智慧を有して居ないからである。

一千八百五十五年に崩御せられたニコラス皇帝は、縁談を切り出した君主である。相手は、フレデリック・ウイリアム三世の長女普魯西のシャーロット皇女で、ニコラス皇帝がまだ大公に過ぎないで、露西亞寶位の繼承者に爲れるとも思つて居られなかつた時の事である。皇女の教育も最早十分だと思はれた時、偶其の家庭教師であつて老女が古風な小さな指環を奉つたのである。皇女は、其れからと云ふもの、何時も之を嵌めて居られた。皇女が此の指環の贈物を受けられてから一年ばかりの後、ニコラス大公が貴賓としてウイリアム三世の宮廷に來られたのである。すると、大公と皇女とは相愛の身の上と爲られたのであるが、或る日午餐の席上で相隣つて召上がつて居ると、大公は、約束の章として其の指環を頂戴し度いと申し出された。

『あら、指環を呉れると仰言るんですか、午餐の席で、皆さんの前で。』



「えーと——彼の麵麩の中に押し込んで、渡して下さい。」

大公の粹な主張が通った。皇女は、麵麩に其の指環を突込んで渡されたのである。これから話は佳興に入る。愛を得た大公は、皇女が嘗て爲たことのない吟味を爲て、皇女が嘗て見付けたことのないものを見付けたのである。と云ふのは、佛蘭西語で内面に施した銘の事で、銘には「露西亞皇后」とあったのである。して見ると、皇女は、皇后と爲る前に妻となり母となられたのは別問題として、前々から豫言と言つても可いものを著けて居られたのであった。かくて、ニコラス皇帝は、一生其の小さな指環を鎖に附けて頸に懸けて居られたさうである。

### 悪魔に抗せよ

動物を馴らす事を職とする人の談に據ると、獅子や虎や豹の如き猫

族の獸猛を上手に取扱ふ秘訣は、始終自己を畏がらせるに在ると云ふ事である。彼等は、恐怖の念を失ふと、直に前を通る人にも飛びつき度がる。其の上、本來が反逆的な奴であるから、主人が其の方に向いてさへ居れば、敢て反抗しようなど、は爲ないけれども、一度眼を離すと、飛び掛からう飛び掛かやうと思つて勇氣を集中する。人は彼等が恐怖の念を忘れて、後方から掛かる機會を覗つて、番人に躍り懸からうとする其の時を決して知らないのである。

○吾人が悪魔と闘ふのも、丁度其の通りである。悪魔は、常に後方からか、又は隠れて居て、吾人に躍り掛からうと隙を狙つて居る。

悪魔は、誰か食ふ可き人は居ないかと、咆る獅子の如く、探し廻る。

けれど、勇氣に向つては甚だ臆病なものである。「悪魔に抗せよ、悪魔は遁れ去らむ。」と云ふ宣言は、使徒ジエトムスが初めて述べた

時と等しく、今の時に於ても眞理であるのである。

### 千辛萬苦の結果

諾威の大探險家ナンセン博士は、倫敦で非常の歡迎を受けた。七千人の名士は、博士を慰勞せんが爲に集まり、ウェールズ親王は、帝室地理協會の金牌を贈呈せられた。ナンセン博士の身にすると、北極の荒漠無人の境に於ける寒威危険など、思ひ較べて、其の對照の甚しきに驚いて、言ふ所を知らなかつたであらう。が、此の名譽は、其の荒漠無人の境で贏ち得たのである。

○偉大に到るの途は、決して樂なものではない。苟くも眞價ある事物は、悉く千辛萬苦の結果ならざるはない。此は精神界に於ても亦眞である。基督は、實に遠き昔に於て此の眞理を説破し給う

たのである。

「其の生命を保全せんと欲する者は、之を喪ひ、我が爲めに生命を喪ふ者は、之を保全すべし。」

### 自ら救ひ得ざりき

エリザベスと云ふ僅十一歳の少女が、母の病中、家事上の用を足して居ると、まだ小さい弟がランプを顛覆した爲に、火は忽ち其の嬰兒の著物に燃え移つた。恐くはあつたらうが、神妙にも少女は、嬰兒を助けやうと度胸を据ゑて、助けを呼びながら、嬰兒を抱くなり長椅子の處に駆け付けて、火の消えて了ふまで彼方此方に轉がした。が、自分の著物に火が燃え移つて、嬰兒はもう大丈夫だと思ふ間もなく、生命に障る程の大火傷をした。少女が一心に嬰兒を助けた爲に、嬰兒は大した事もな

くて済んだが、此の奇特な少女は、憐れや、數時間後に絶息したのである。

○此の勇敢なる少女は、基督の精神に生きて居たのである。基督は、其の十字架に懸けられた時、刑吏からは、

『彼は他人を救ひて、自己を救ひ能はず。』

と、侮辱的の揶揄を受けたのであるが、思ふに、此の語は、彼等刑吏が考へた以上に、眞なるものであつたのである。

### 野徑の骸骨

クロンダイクに行つた一人の青年が、故郷なる其の父に書を寄せて、其の白馬の急流を通過した折の状を眼面見るがやうに認めて居た。其の書に據ると、ダイアからクロンダイクに到る間は、路傍で斃れた薄運の坑夫達の最後の休息所だと云ふことを示す目標だけの杭が方々

に立ッて居るさうである。又急流で生命を亡くして、巖石や砂洲に打ち上げられた人達の骸骨や死骸は、幾何見たか分らん程で、皆埋葬しやうにも寄り付かれない處に在るのださうである。

○嗚呼、人生の河上にも、其のやうな骸骨は、澤山あるのである。そして、其れは、皆罪惡の渦卷に巻き込まれ、潰れて死んだ結局、山なす難破物の上に投げ出された死骸であるのである。

### 精神と行爲

何が靈性を形成るか、と云ふ問題に關しては、他の百般の問題に關してよりも、間違ッて居る教訓が多いやうである。吾人は、常に眞に精神的なる人は、日常經驗と云ふ世間一般の食物の中から、生命の麩麩を見出すものであると云ふ事を忘れて、兎角怪奇非凡のもの、中から精神

的なるものを探し出さうと爲る者である。真正なる精神的生命を造るものは、吾人が爲す特別に神聖なる行爲でなくつて、實に、以て日常の事物を處して行く其の尊敬す可き精神である。フレデリック・ラングブリッヂは、其の詩中に靈魂を頌して曰く、

『四邊の街々暮れ初めて、

恥辱、悶惱、垢漬のもの擾々、

さはれ、翔る燕の翅きらゝに、

水溜りには星の影あり。』

### 劍魚の悔

ホノルルを解纜してサンフランシスコに航行する船が、平穩の天氣で是れと云ふ理由も無いのに、漏口を生じた。が、載貨を卸した結果、船

が水面から何呎か浮き上つたので、始めて原因が発見せられた。船腹から確かに二時は突抜けて居た儘折れた劍魚の劍があつた。其の魚にすると、十時もある板張を劍で突き透す程の勢で、船體目懸けて打つて懸つたのであつた。其の尖端は、船艙内で二時も擴がって居た位であるから、逆も其れを引抜くことが出来ないうで、到頭根もとから折れて了つたのである。板張が其の武器の兩側に裂けたので、水は、其の口から浸し込んだのである。船の損所は困難なく修繕せられたが、劍魚の損害は如何とも爲し難いものであつた。

○神に叛く悪人は、船の胴に打つて懸つた劍魚と同じ結果を見るに至るとは、ダビデの語である。讚美歌作者は曰く、

『視よ、其の人はよこしまを産まんとして、苦しむ、殘害をはらみ、虚偽をうむなり。また坑を掘りて深くし、己がつくれる其の溝に

陥れり。其の殘害は己が首にかへり、其の強暴は己が頭上にく  
だらん。』

### 愛の指環

誰であつたか覚えて居ないが、カミリアス・レオナーダスの書いた古  
書を漁り出した者がある。此の書には、珠玉に就いて面白い事が澤山  
記されても居るし、大分多數の石の名が列擧されても居る。が、孰も是  
も、今日では見られないもので、著者想像の所産だと思へるものが多い  
やうである。レオナーダスがアレコリアと云ふ石に關して説明して  
居る邊は殊に怪しいもので、其の説明に従ふと、アレコリアは、人の姿を  
見えないやうに爲るのみならず、『之を口中に啣むと渴を癒す』との事  
である。糞石に就いても述べ居るが、糞石は或る獸類の體内より出るもの

で、之を所持して居ると、愛戀に沈むなどの事は一切無いさうである。彼  
は、エリザベス女皇が、一つ身に著けて居られたと云ふ事に信を置き、チ  
ャールス五世は、四つ持つて居られたと言つて居る。けれど、一番歴史  
的興味のある四個の環は、法王インノーセントがジョン王に献上せら  
れた物であつた。王は、非常に其の環の形、其の數や色や物質を氣にせ  
られたと語り傳へられて居る。四と云ふ數は、四主徳の上に堅固な基  
礎を有する心の不動に象どり、青玉の青色は、信仰を表はし、綠柱玉の綠  
色は、希望を表はし、紅玉の紅色は、寛仁を表はし、黄玉の黄色燦然たるは、  
善行を表はしたのである。そして、環其の物は、其の始なく終なきを以  
て無窮を意味したので、物質は黄金で、これは、ソロモンに従ふと、金屬中  
の一番貴重なもので、富貴權勢よりも人の欲する智慧を意味したので  
ある。

○けれど、何よりも一番善い環は、天に在す父が罪から歸つて來る道樂漢に與へ給ふ愛の環である。神の愛の廣さは何處と云ふ限りなく、最も憐れなる罪人でも、父の許に歸つて來ると、此の赦免の環を與へやうと、約束し給うた程強く表示されて居るのである。

### 皇帝と馭者

塊地利皇帝が散歩をして居られた。すると、忽ち、荒れ馬が主人の馬車の遮泥板を打破して了はんばかりに狂ひ廻つて居るのに御眼が留まつた。フランツ・ヨセフ皇帝は、直に御者と力を協せて馬に掛かられたので、間もなく鎮めることが出來た。其の御者は有りつただけの資本を此の馬と車とに下して居たので、其の歡喜も並々ならず、皇帝に向つて、

『扱何方様かは存じませんが、何とかして御親切に對して御禮が仕りたう御座ります。で、此の馬車にお乗り下さりますれば、御宅までお送り申します。決して一錢でも戴かうなどとは思ひも仕りません。』

と述べた。言ふまでも無く、皇帝は此の申出を承引せられなかつた。けれども、此の憐れなる馭者は、正しい精神を有して居たのである。

○吾等の王エスは、吾等が同胞の中の最も憐れな最も勇氣を喪へる者のために爲せる深切な行爲ならば、何でも、吾等が彼のために爲したと同様に受けると宣ひ、そして最後に、

『爾等、其を此等の中、最も小さき者に爲したるが故に、吾が兄弟よ、爾等、其を吾に爲したるなり。』

と仰せられたのである。

## 天樂の妙音

四〇

彼の大作曲家であるメンデルズゾーンが嘗てフライブルグの殿堂に詣で、其處に据附の風琴を奏させて呉れるやうにと頼んだ。けれども風琴手は彼を知らなかつたので、初めのうち之を拒んだ。が、餘り頼むので到頭許した。かくて、メンデルズゾーンが奏し始めると、其の老風琴手は感極まつたと見えて涙を流して、謹んで其の名を尋ねた。そして、其の名を聞くと齊しく復たさめざめと泣きながら、

『嗚呼、思へば、最少しのところで、メンデルズゾーンに、拙老は、風琴に觸らせも爲まいと爲たのであつた。』  
と言つたさうである。

○さう云ふ風に、基督は、吾等の心の戸を叩き給ふ。基督は、入り來

つて、吾等の天性の琴線を弾じ、以て吾等の狂つて居る絃から天樂の妙音を發せしめやうと渴望し給ふのである。基督が戸を叩き給ふ時、閉ぢて入れまいと爲る人々を迂愚と謂はないで、何と言はうぞ。

## 籠中の頭

スタンレーと一緒に亞弗利加に行つた一人の紳士が、内地に棲息して居る珍禽奇鳥の標本を持ち歸る積りで、大分澤山の鳥籠を持參した。ところが、荷物運搬夫の一人が死んだので、已むなく外の種々な物と一緒に其の鳥籠を放棄した。土人共は、何の用に供する物であるかは知らなかつたけれども、大喜びで之を拾つた。が、結局其の圓筒形の籠を頭の裝飾物の一種と斷定したので、酋長共の中で其の底を打ち離して

之を被り、見て呉れがしに意氣揚々として濶歩した者もあつた。中に一人の自ら賢明を以て許し、且つ白人が食事の際、器皿を用ふることを目撃したことの有る會長は、其の籠を食器と思つたので、儀式振つて一口毎に其の戸を開けたり閉めたりして、肉を取り出したのである。

○近世の政治的方面では、頭に籠を被つて歩いて居る者が、随分澤山ある。黨首は、黨員を籠に入れて、勝手に働かせず、語らせず、投票も爲せないのである。中に最も悲む可く、又最も恥づ可きものゝ一つは、賢明なる基督教信者でありながら、或る黨首の籠に頭を突込んで、名譽の徽章とでも思つて居るのか、得々然として濶歩するのを目撃することである。

### 噬臍の歎

一人の青年がウエスト・ポイントで非常に落膽したと云ふ話がある。其の青年と云ふのは、陸軍士官學校に入學する目的で、ウイコンシンから長途をもつとも爲す遣つて來たのであるが、大きな印の捺して有る證書が何枚も要ると言はれて、血を吐く思を爲たのである。抑も彼は、ウイコンシンの一小邑に生れて成人となり、軍人たらんことを夢想し、軍隊教育を受けんが爲にウエスト・ポイントに出て行かうと決心して、ウイコンシンからハドソン河まで長い困難な旅をし、二箇月も徒歩したり貨物列車に乗り込んだりして、やつとの事で到着したので、やれ嬉しやと廠舎に入らうとすると、番兵に停められて、そして此々の物が必要であると説明せられたので、其の青年は斷腸の思をなして子供のように號泣したのである。

○最後の審判の時に當つて、そんな風に噬臍の歎を發する者があ



らうと、救主も言ッて居られる。自らは天に入らんと爲てるんだと想ッて居ても、其の用意を爲て居なかつたので、終に追ひ返さるゝ者があらう。天は、用意してゐる人のために用意してある處である。

### 傳書鳩

吾も吾もとクロンダイクの金坑に出掛けて行ッた時、アラスカに伴れて行かれた傳書鳩の中で、眞先に放たれたのが、一千八百九十七年九月二日、オレゴン州のポートランドの自分の時ときに降りて来た。次の文句の記されてあつた紙片が其の片足に附いて居た。

『チルクート峠の頂上にて。八月二十五日。ポートランドなるロバート・ウィルマン君に。一同健在にして元氣旺んなり。今冬は来る

ことなきやう、足下の知人に告げよ。トーマス・ケイン。』

鳩は、千餘哩の間、幾多の山嶺、林野を越え、鷲鷹の千危萬險を備つよに嘗め盡して、其の家郷の天を望んで飛んだのである。而して、疲れこそしたが、無事に歸り來つたのである。

○嗚呼、鳩の胸に家に歸り行く性能を置き給へる、其の同じ神は、吾等の心に不滅の希望と約束とを置き給うたのである。豈萬物の靈長たる人の身でありながら、家に達するまで、有らゆる障礙有らゆる壓迫を凌がないで可よからうか。

### 愛と氷山

パリングトンプス夫人の叮嚀深切の教誨に依ッて、基督と救済とを悟り得た一囚人が有つたが、其れが次のやうに言ッて居る。

『愛は氷山をも融かす。合衆國內の四人であつて、説教者の口から、吾は爾等すべてを愛す』と聞いた者が別に有らうとは思へない。然るに、余は之を聞き得たのである。其の意味深長な數語は、彼の女の心から溢れ出て、宛然乾き渴ける地上に置ける薫しい露の如く來つたのである。其の作用の魔術のやうであつたことは言ふまでも無い。凍れる土は融け、氷に封されて居た小川は、油の如き水滑かに、新たな希望は、暖和な日光の洗禮を受けた春の葡萄蔓に汁の上り行く如く、余が心に起り來つたのである。』

○愛は、人をして此の世に立たんことを思はしむる秘密で、基督が其の寛宏なる豫言に、

『我若し地より擧げられなば、萬民を引ききて我に就きたらせん。』と述べ給へる其の高める力が即ち愛である。

### 小事をも蔑むな

粗末な風をした女が、或る街で何だか頻りに拾つて居た。其の街と云ふのは、謂はば貧民窟で、襤褸ぼろを著た跣足はだしの子供が始終遊んで居た。今其の女が何だか拾つて居るのを見た巡視中の巡查は、此奴怪こいつしい者と目を離さないで居た。けれど、女はそれに氣が付いたか付かないか、相變らず身を屈かめては頻りに拾つて之を前掛の中に入れる。到頭巡查は、つかつかと女の側に行つて、怒鳴り聲で如何にも嚇おどして遣らうと云ふ態度で、

『御前の前掛の中に持つて居る物は、何だ。』

と詰め寄つた。が、女はおろおろして別に答へも爲しなかつたので、巡查は此奴こいつてツきり貴重品を拾ひ取つたんだなと思つて、愈い其の前掛の中

の物を見せるか見せないか如何だと今にも逮捕し兼ねまじき劍幕を示した。で、女は前掛を擴げて、一握位の玻璃の碎片を示した。案に相違したので、巡査は、手持無沙汰げに、

『一體そんな物を如何爲やうと云ふんだな。』

と問ふと、女は、

『子供衆の遊ぶ此の通りに在ッてはと思ひましたので、取り除けやうと考へましたばかりで。』

と答へた。

○優しき彼の女の心かな。彼の女は、自分の出来るだけの事を爲やうと爲たのである。若しも吾人が各自、若き者弱き者の跣足を怪我させまいと心掛けたならば、此の世は如何に嬉しいものであらう。

## 獻身

二人の婦人が、別に同伴者もなく、波濤萬里の大西洋を横斷すべく汽船に搭じた。航海中兎角風荒れて、船は木の葉の如く揺れるので、海には馴れない婦人の身の一層恐ろしく、其の上病み心地で、二人共天にも地にも唯一人のお友達と思ひ込んで、自分達を受持ッて居た小造な女給仕にしがみ附いて居た。其の女給仕と云ふのは、蘇格蘭の生れで、心立の優しい、中年を二つ三つ過ぎて居るかと思はれる位の女であつた。幾何職務とは言ッても、大きな騒がしい汽船の上の事だから、淋しいと思ッて居た矢先に、二人の婦人が色々深切に爲て呉れるので、つい沁々と話も爲るやうになつた。其の話に據ると、彼の女は、二十年もグラスゴーの小さな店に勤めて居たのであつたが、運好く今の職に有り付いた

ので二年勤続して居ると、故郷の山地に佗しく住んで居る年寄った母親の處に歸ッて行ッて、住み馴れた小舎で、少しばかりの畑を相手に、餘生を平和に送るだけの貯蓄も出来るのださうで有った。

『阿母も其を俟ッてるんです。思ふと嬉しくて仕様がないうんですよ。と眼を輝かしながら、真面目に爲ッて、語り終へた。そして、』

『お茶でも持ッて参りませう。』  
と言ッて去った。

が、お茶を持ッて來た者は、見馴れない女であつた。

二人の婦人は堪へ切れなかつたと見えて、

『ジエンさんは何處に行きましたの。』

と問ふと、女は、

『給仕長が外の處に遣りました。お客さんがお二人御病氣なんで、其

の方の御介抱に参つたんです。』  
と答へた。

『屹度私共ほどに彼の方でなくツちや悪いなどとは思ッて居も爲まいに。』

と二人の米國婦人は呟いた。が、ジエンは、二度と姿を見せなかつたのである。

其は斯う云ふ譯である。

ジエンがお茶を取りに行くと、途中で、給仕長が、

『婦人客に病人が二人出來ました。醫師は唯麻疹だけなら好いがと言ッて居るんです。が、兎に角給仕を一人附けて隔離しなければならぬ。僕は貴嬢を選定したのです。直要る物を持ッて行ッて下さい。』

『行かなきゃならんのですか。』  
とジエンは口籠くちごツた。

『貴嬢は一人です。外の方は皆子供みんなと云ふ厄介物があります。そして、其の病氣は悪性なんです。』

と給仕長は躊躇しながら、ジエンを見守まもツて、

『是非お行きなさいと、強ひる譯には行きません。が、誰か行かなくっちゃ。』

ジエンは、言葉もなく佇たんだ。彼の女は、故山の草家くさやの戸に立てる阿母あはを見た。嗚呼、思へば、多年の間異郷の空に千辛萬苦したのも皆阿母の爲であつたのである。

『宜よろしう御座います、参りませう。』  
と静に答へた。

それから少時しばらくして、ジエンは、一つの包を抱かへて、病室に入いツた。そして、彼の女が入ると齊しく、重き櫳の戸が締しまつた。

二人の病人が隔離されたと云ふことは、船客の驚愕を招く憂があるので、秘密にせられた。幸にも、患者は、二人とも、其の船が入港する前に全快して、船も交通遮断を受けなくて済んだ。

『外に患者は無いですか。』  
と檢疫醫が訊たねると、

『唯一人。二人の婦人を介抱した者で。彼の女は、元來が壯健でなかつたです。で直すにまるツたです。』

と船長は答へた。

『其れだけで結構でした。著船して差支ありません。』  
船が埠頭はとに著く數日の前、一夜一個素朴な木の箱が甲板に持ち出さ

れて、急に手短な供養が済むと、海中に沈められた。

『誰が死んだのです。』

と船客の一人が驚いて尋ねた。

『女給仕一人だけです。』

と答へられた。

○此の簡単な話を聞いても、斷腸の思がするでは無いか。けれど、エスキリストが吾等の爲に十字架にかゝり給うたと云ふ廣大無邊なる獻身的慈愛を彷彿せしむる一小事實に過ぎない。彼の氣高い蘇格蘭生れの一小給仕は、不幸にして死にはしたものの、運さへ好ければ病氣を遁るゝことも出来たのである。且つ彼の女の姉妹の爲に生命を落したのである。然るに、エスキリストは、有らゆる天國の光榮を排して、吾等憐れなる者等の罪に病める下界の

病室に降り給ひ、そして吾等に代つて死に給うたのである。けれど、十字架を見るも融けざる心の人が世間に少くないと云ふのは、怪訝に堪へざる次第である。

### さまよへる者

基督は、常に道に迷へる者を、覓めて、彼等を寒心す可き危険から平和にして、靜寧なる檻かごに送り還さんと爲給ふのである。ジエームス・レーン・アレンの温味津々たる「さまよへる者」と題する一詩は、此の眞理を説明して餘蘊なきものである。世の父たり母たる者、次の數節を誦し給はば、蓋し思半ばに過ぐるものが有らう。

『いとし吾が子羊、

夜の檻かご忍び出でたり。

野を森を吹き渡る風

寒うして膚を劈く。

かく遅く心太くも、

恐なる足にすがりて、

何處をかさまよふ。

いとしや野路の

荆棘に籠められ、

將た切り立てる

崖をすべりて、

悲しげに泣きつゝ

迷ふ子羊を

見し者なきか。

おゝ、牧守る君よ、

恐怖多かる、

陥坑多かる

路行く羊を尋ね給はれ。

惑はされたる彼の頭に

御空より君が怨を

降り給ふな。

願はくは羊の群が、

御手に導かれて、

君が命令のまにまに、

ひたすらに従ひ行く、

彼の善き國の、

長閑なる牧の大野に、

取れ、吾が迷へる子羊をも。』

五八

### 最大の金坑

世界でも最も豊富な金坑は、濠洲ビクトリア州のバララット市に在る。市の住民約二萬五千人は、殆んど悉く金坑に使はれて居ると云ふ有様で、市の地下に位して居る洞道の全長一百哩の上に出で、其の深さ二千呎に達する者も少くない。バララット市の周囲は、今日まで何度も採掘せられたのである。市の下に當って居る坑中の巖石は、黄金を含むこと決して多くは無く、標準金の重さ一噸中僅に半オンスに過ぎないのである。それに、此の一坑だけで、採掘の當初より今日に至る約三十年間に、二五〇〇〇〇〇〇弗を産出したのである。作業が頗る

系統的で、又頗る完全である爲に粗金は甚だ劣等なるに拘らず、産額は他に類を見ない程多いのである。石英を出すことも、實際無盡藏と謂つても善い位で、鑛脈廣大、此の地方一面に亘つて居て、こゝ一二世紀位の間は、とても取り盡すことが出来ないうである。

○基督教會なるものは、宜しく此のバララット金坑に訓へらるる所が無くてはなるまい。最大の金坑であつて、靈魂の救済を要するものは、學者とか富者とか云ふ者の間に在る金鑛の小さい衣囊中に存せずして、實に普通人の大鑛脈中に在るので、其處にこそ救ひ甲斐のある金もあれば、又基督の指導の下に救ふことも出来るので、決して貧しい人の粗金はないのである。

### 雁と箭

五九



一人の銃獵家が、インディアナ州のカンカキーの沼地で、一群の雁を射止めて、五六羽を囊に入れた。見ると、其の中の一羽は、驚く可し、胸に長さ九寸ばかりの箭を負うて居たのである。で、此の雁は、近處近在の不思議譚ともなり、學者仲間の研究物とも爲つたが、結局斯う云ふ事に歸著した。此の鳥と箭は、アラスカのユーコン河域以外、地球上如何なる場所から來たものでもない。何となれば、其の地方を除いては、そんな箭はないとの事であつた。畢竟、其の雁は、夏の間アラスカに居て、其處で一印度人の箭を受けたのであつたけれども、箭が不完全であつた爲に、落命するに至らなかつたのである。其の雁も、一度は、一野蠻人の武器を蔑視したわけだけれども、終に一段の進歩を爲して居る文明の武器にかゝつて、生命を失つたのである。

○之と同じく、世には、亂醉、娛樂、僞瞞等の大罪を輕視して、不知不識の間に、終に驕傲、不信等、一段上手の武器の爲に身を滅ぼすに至る者が、甚だ多いのである。

### 黒鐵の鎖

白人がテキサス州に移住し始めた當初の事である。花婿花嫁が結婚の其の當日に、一團の印度人の爲に捕虜にせられた。ところが、印度人等は、處刑の目的で、二人を野牛の背に縛り付け、そら、新婚旅行に出掛けよとばかりに、惡魔のやうな嘲笑の聲を揚げて、其の犖猛な野牛を解き放つた。然るに、幸にも其の野牛が、到頭友人等の爲に捕獲せられて、二人は、九死に一生を得て、幾久しく睦まじう暮らしたのである。

○思ふに、狂暴な野獸の背に縛り付けられるのは、まだまだ、假藉することなく、魂を死の門に曳きすり落さうとする、彼の貪婪飽くこ

とを知らざる習慣と云ふ黒鐵鎖に縛せられて如何とも爲し難きよりは、餘程優であるではないか。

### 徒消する物無し

神の大宇宙には、鄙吝と云ふものの形跡は毛筋程も無い。到る處豊富なるものである。けれど、一物と雖も、無益に消ゆることを許されては居ない。如何に彼の天の監視者が腐朽死滅を變じて美と爲すかは、琥珀の成立に於て説明されて居る。

琥珀の主なる原産地は、バルチック海の沿岸である。一體琥珀と云ふものは、護謨の化石で、今見ることの出来ない松の一種が滲出した脂が本である。琥珀松の大きな森が自然に倒れて朽る。すると、其の樹脂が、非常な嵩を爲して、澤だもか池だとか又森の土とかの中、に堆積す

る。そして、海岸の段々低くなつて居た部分を、海が蔽ふやうになり、次第次第に堅く爲つて居た琥珀が、終には大洋の底に沈澱して了ふのである。

今日宇宙に生存して居ない動物なり植物なりの標本で、鮮明に而かも些の缺損もなく、包含せられて居る琥珀の標本が二百種以上ある。そして、此の標本中には、珍奇彩麗、到底評價す可からざるものも五六ある。英國の一蒐集家の持つて居る標本陳列館は、實に五十萬弗の價額あるものである。其の中で、一番珍奇で、今日之に比す可きものなしと稱せられて居るのは、寶玉の小怪物、かう言つただけでは分るまいが、長さ八寸位の蜥蜴が、而も其の形も色も完全に、香油で防腐せられたやうに一片の琥珀中に包藏せられて居るのである。眞實多くの場合に於て科學は、唯此の仲介物に依つてのみ、幾千萬年の以前に地球上から滅

絶した動物の詳細を研究し得るのである。中には、何匹かの蠅が、今にも飛びさうに、翅を垂れた儘保存せられて居て、黄色い墓標を透して輝いてる七彩は、如何にも其の蠅共が生きて居て、日光中に浮んでるのかと思はるばかりである。

### 心の深さ

ケルダイブと呼ばれる、北海の一孤島に、恐らくは世界最奇のものであらうと思はれる湖水がある。其の水の表面は、全く淡水で、淡水動物及び淡水植物が棲息して居て、其の底の方は、大海の碧暗々たる深さに在る水のやうに鹽分を含有すること頗る多量で、海綿やら鹹水魚が生存して居て、常に學者を絶望せしむるのである。ナンセン氏も、其の北極探検中極海で推流されて居た間に、頗る之に似てる事を發見した。

即ち氏は、幾度も海の表面で純粹な淡水を得ることが出来たのであるが、二三呎も下の方は、鹹水であつたさうである。

○之に頗る能く似てる人が、又甚だ多い。男にしる女にしる、基督教の文明の眞中に、養育せられ、大に基督教の旗幟に影響せられた爲に、偶然の観察者には、基督信徒の如く善良であるやうに見える者がある。さう云ふ風な人は、屢、自ら純正な心底基督信者である隣人と同じく、正義を愛することを感謝することも有る。けれど、其の基督教を奉じて、淡く清きは、其の水の表面だけである。で、何か意外の變が起るか、彼等を根底まで攪拌するやうな探心の試みが遣つて來ると、神に抗する敵意、基督の支配を排斥しようとする云ふ心の鹹水が表面にまで上つて來る。人の心は、如何に深くとも、何時かは露はれる。心は、何處までも、基督の精神を體して、清淨でない

ければならない。さうでないとい何時かは罪と云ふ鹹水の爲に左  
右せるゝに至るからである。

### 家寶と屑屋

北米合衆國のシガゴ市に棲んで居た或る富豪が、炎暑の候も既に去  
らうとしたので、ハドソン河畔の夏館から、市の住宅に歸らうと思つて、  
其の家の炊食を司つて居た者に命じて、邸の隅々残る所なく片付けて、  
家族一同が歸つても可いやうに爲て置かした。ところが、其の男が段々  
掃除なり片付なりを爲て居る中に、屋根裏の部屋に積み重ねてある  
書類やら書物やらを見出して、其を無用の瓦礫多と思ひ込んだので、一  
人の屑屋に一封度二仙の割で何も彼も皆賣り拂つて了つた。處が其  
が後になつて父祖傳來の神聖なる遺物であつて、其の富豪の家に取つ

ては金錢に換へられないものであると云ふ事が分つた。で、方々に手  
を廻して搜して居ると、偶、其の屑屋が其の一部を或る歴史協會に賣り  
込まうと爲て居たところを見附け出して、事情を云々と告げて、漸くの  
事で、取戻すことが出来たと云ふ話がある。

○世人の中にも、之と同じ様に、金錢づくでは手に入れることの出  
來ない珍寶を、瓦礫多物に過ぎないと言はんばかりに賣り拂つて  
了ふ者が多いやうである。中にも、若い人達の多數は、ソロモンが  
言つてる様に、

『竊みたる水は甘く、密に食ふ糧は美き味あり。されど、彼處に  
ある者は、死にし者、其の客は陰府の深き處にあることを、是等  
の人は知らざるなり。』

と言ふことを思ひながらも、己の清淨にして邪氣なき魂を賣り拂

ッてるのである。

### 樹上の氷環

余が先年汽車でモホークの河谷を通過した際は、其の河の出水した爲に、谷一面が滄海に變つたといふ直後のこととて、車窓に倚ッて見渡すと、其處等に叢生して居る樹木の幹なり枝なりに大小の氷環が附いて居て、出水當時の水嵩の標を残して居た。其が、余の特殊の興味を惹起した。出水當時に張り詰めた氷が、水が引いた後にも枝幹の周圍に氷の環を爲して残つたのであつた。當時の水高より五六呎も上に當ッて樹に氷の環が懸ッて居たのであるから、中々の奇觀であつた。

○が、余は、此の奇觀に對した時、此は世上大多數の人達の状態を説明して居るのではないかと思つた。彼の教會で見受ける人達も、

成る程或る時に於ける宗教の高水標點に達して居たことも有るが、今は唯想起と云ふ一種の氷環を残して居て、常に之を示すのみで、靈的生命の潮流が、其の心中に洋々たる壯觀を起すやうな事は無い。憐れむ可き光景ではないか。

### 天の窖

シカゴ市に一人の吝嗇家が住んで居た。餘り猜疑心が強くて、人を信ずることが出來ず、所有金を銀行に預けることさへも爲ないで、窖の中に皆埋めて置いた。すると、一夜一組の盜賊が、窖に忍び込んで、隅々残る所なく砂も土も皆掘り返し、黄金入りの箱を見付けて、まんまと持ち出した。可憐な老人は、殆んど其の損害の爲に、氣も狂はんばかりになつたのである。

○が世間では、此の老人の轍を襲うて、金銭では得られない珍寶を保管しようとする者が頗る多い。彼等は皆、安全な保管所として天の大丈夫な害があるに拘らず、此の地の害の砂や土の中に其の珍寶を積まうとするのである。基督宣はく、

「盗くひ鏽びくさり、盗人穿ちて竊む所の地に財を蓄ふること勿れ。盗くひ鏽びくさり、盗人穿ちて竊まざる天に財を蓄ふ可し。蓋なんちの財の在るところに心も亦在る可ければなり。」

### 狒々と猫

エーイーブレイム博士は、通俗科學月報誌上に、博士が獨逸の家庭に飼って置いた愛物の狒々に就いて話を掲げて居る。其の狒々は、最初

其の村の子供達に情義を集中したけれども、子供等が恐れて寄り付かないのを大に悲しんだ。で、犬や猫の方に轉じて、種々の事を爲ては、犬猫を戯弄したり惱ましたりして居た。ところが、一匹の快活な小猫が、或る日其の狒々の仲間に爲って居るのに飽きて、大方始終抱かれっ切りであつたが、遁げ出さうと企てた。狒々は、強く反對した。斯麼風に遁げる遁さないの争をして居る中に、子猫が無理に遁げ出さうとして、狒々の肩の邊を搔裂いた。すると、狒々は苦々しげな容貌をしながら、己が愛物の前脚の片方を持ち上げて、注意深く検査し、あんな小さな猫に鋭い爪があるのを危険な贅物と思つたらしく、一本一本加減を爲い爲い皆噛み切つて了つたのである。

○斯くの如きは、或る種の人々が改良に就いて懐抱して居る觀念である。けれど、基督のそれは、更に更に深遠なものである。基督は、

吾人の情慾性の三つを破壊することなく、唯吾人の心念を淨化して、吾人の全力を正義の防衛に注がしめ、以て吾人の先天を改善しようとするのである。理想的基督敎信者たるの資格は、吾人の本性を障碍するに依つて得らるゝにあらずして、一切を擧げて基督の靈魂と調和せしむるに依つて得らるゝのである。

### 心靈上の外科手術

若しロトが心情に於て、アブラハムの如き大人であつたならば、同じ國に於て彼等二人に向つて十分の餘地があつたのであらう。が、ロトは、貧乏足るを知らざる小人であつた。かゝる人に向つては、何處如何なる處でも平和に暮らすことは困難である。

頗る興味ある外科手術が、北米合衆國ジョージア州のアトランタで

行はれた事が有る。其は齡既に十一歳に達して居ながら、嬰兒の智慧しかない女の子の、矇昧な心に智慧の光明を生せしめたのである。或る學識經驗共に秀でたる青年醫師が、其の疾患は、女兒の頭蓋骨の過小過硬にして、腦の發育を阻害せるに原因したることを感得したので、頭蓋を擴大して、腦に餘地を與ふるが爲に、特別手術を施さんことを其の父母に謀つた。處が、物の分つて居る親達であつたので、實驗的の危険な其の手術を受けることに決定した。幸にも、手術功を奏して、其の兒は、直に著しい心的發展を示したのである。

○ロトのやうな人達は、皆、心を開いて、一段と大きい視力を容れるに至る餘地を與へんが爲に、一種心靈上の外科手術を要するのである。

## 比公と虞氏

老年に爲つても、早年時代の活力が存續して居て、心なり手足なりの用便を、興味多く幸多く達することが出来ようと云ふが如き元氣で、壯年なり中年なりを送るは、大事業である。余が長い間に讀んだものの中には、随分心を傷ましめたものも尠くなかつたが、中にもビスマルク公の述懐として信を置くに足る次のものは、一字一句悉く悲愴の感を強うするのである。

『予は倦怠を感ず。されど、病めるにはあらず。予の悲愁は、人生の不安なり。予は、實に人生の間に一物をも有せざるなり。予が見る所のもの、一も快樂を興へず。予は寂寞を覺ゆ。予は妻を失ひ、兒は皆従ふ可き各自の職務を有す。農藝も殖林も興味を失ひ、政治は將に

予を惱ましめんとす。』

グラッドストーン氏のアルメニア人に對する熱情、ギリシア人の勇壯に對する賞讃、世界のいづこを問はず、善行のある毎に氏の感じたる興會及び幸福は、ビスマルク公の述懐と全然趣を異にして、赫奕として天に沖するの概がある。吾人若し眞に基督に服事し、世界を改善するに方め、以て壯年なり中年なりを送らば、老年に爲つても、人生に興味を失ふことなく、反つて、青春の氣は、常に現はれ來る彼の自由と正義とに盡さんとする新なる闘争の爲めに、旺盛なる可きである。

## 地中の砲艦

ミネソタ州で、或る人が井戸を掘つて居て、偶然にも昔時の西班牙人が使用した砲艦を發見して、其の後立派に之を發掘したことがある。



思ふに、一千六百年の頃此の州の大部分が尙ほ水底に在つて、當時の西班牙の發見者等は、此の地方あたりまでも其の砲艦を溯航せしめたのであらう。大砲五門、白砲五門及び砲彈の多數が艦上に見出された。其の砲艦は、或る小河の底にあつたので、其の小河と云ふのは、昔時航行の出来る大河であつた事は疑ひない。然るに、年と共に全然土砂の爲に埋没せらるゝに至り、終に斯くの如く今日偶然に發見せられたのである。

○此の土中から掘り出された砲艦も、古器物としては面白い物に相違ないが、砲艦としては全然價值なき物である。教會の中にも、之と事情を同じうして居るものが随分澤山ある。彼等は、別時代のものである。現世生活の胸上に浮んで、其の風潮と歩調を合せ、其の生きて居る心と接觸を保たずして、其の堆積物の下に埋没せ

られ、そして忘却せられたのである。彼等は、死したる過去の面白い遺物ではあるが、基督の爲に世界間を捕虜にしようとの聯合軍としては、價值なき物である。大抵の教會も亦、夫々同一事情にある若干の職員を有して居るのである。

### 富豪の失明

ニュー・ヨーク市の商人で、屈指の富豪某が、視覺神經の萎縮に歸因する失明の爲に、甚しく悩んだことがある。で、百方手を盡くして、治療と云ふ治療は行つたけれども、捗々しいこともないので、彼の視力を恢復さして、兩眼の用を爲すに至らしむる者あらば、一百万弗の報酬をしようとして云ふ事を發表したのである。そして、試験的に種々の手術を施して見るやうな場合が有らうと云ふので、此の富豪と同じやうな症状で

困<sup>ニ</sup>ツて居た貧窮な一青年を雇ひ入れた。此の金満家の爲に先づ如何なる實驗をも受けようとして居る青年は、利害關係の頗る大きい任務を帯びて居るやうな者である。何となれば、其の實驗が巧<sup>ウ</sup>く行けば、彼も視覺を恢復し得て、併せて雇主である富豪の失明をも根治するやうな譯<sup>ワ</sup>になつて居るからである。けれど、若し彼我位置を交換して富豪が其の資産、其の視力、其の生命をさへ犠牲に供して、此の貧窮な青年の地位に立ち、以て快癒と愉悅とを與へんとするので有つたならば、更に更に美しき興味ある事であらう。

○基督が吾人のために爲し給うた所は、更に其の上である。天の榮光をも棄て、吾人の夢想だも及ばざる尊貴の地位を顧みず、進んで貧しく寂<sup>ま</sup>しき追放の身となつて、そして吾等の身に代つて十字架の上で死し給うたのである。かくて、吾等の爲に墓穴にまで入

り給うたのであるけれども、死の圍<sup>かみ</sup>幾<sup>く</sup>重<sup>え</sup>を掻き拂うて、赫奕として天に立ち給うたのは、エスに眠る者は、皆等しく勝利を得るに至ると云ふ證據を示し給うたのでなくて何である。

### 靈的財源

ニュー・ジャーシーの一紳士が、自己所有の畑地内に、小金坑に等しいやうな物を持つて居る事を發見した。其の金坑を彼は全く知つて居なかつたけれども、外の人達は精<sup>せつ</sup>々<sup>せ</sup>と稼いで自分等の私利を營んで居たのであつた。と云ふのは、斯う云ふ譯<sup>わけ</sup>である。其の紳士の所有地内に一條の細流が有つて、其の細流の岸に一種の葦が繁生して居たが、其の一種の葦と云ふは、海泡石製造品を琢<sup>みが</sup>く爲に廣く用ひらるるものであつた。處が、此の葦は、稀な物であるが故に、頗る高價な物であつたの

である。紳士は、是れまで之を邪魔物とばかり思つて居たのであつたが、豈に圖らんや、利に敏い人達は、密に之を刈取つてニューヨークに積み出して居たので、紳士が調べて見ると、驚く可し、彼は多年の間、自己所有の畑地から毎年一千弗宛の草を賣られて居たのであつた事が分つた。

性質の同じやうなものであるが、金額から言ふとも、と大きいのが、モンタナに起つたことがある。幾年かの間、モンタナ州のブツテから近いアナコンダ及びセントローレンスの坑區から流れ出る水は、多量の銅を含んで居ると云ふ事は知られて居たけれども、其の儘にせられてあつたのである。處が、近來坑區から水中に混じて流れ出る銅を防止する装置を案出した。すると、今まで流しつ放しにして居た銅の殘物は一年三十六萬弗、即ち一日千弗を算すると云ふ事が發見せられた。

そして、其の損失が發見せられた以前、少くも其を防止する方法が發見せられた以前には、不生産的に廢棄せられた金額は實に一百五十萬弗に達したのであつた。

○世間近來の最大恨事は、吾々の教會に於ける靈的財源の空費である。幾千萬の男女は、皆人格なり、教育なり、修養なり、能力なりで、十分主の爲に立派な仕事を爲し得るに拘はらず、世の濁惡に沈溺せるを袖手傍觀せんとするのである。若し其の葬り去られて居る才能を隱所より取出して、其の教會各方面の活動に資することが出来たならば、如何に巨額の靈的資産が現はれることであらう。此の靈的能力の棄て、顧みられざることが、最も悲む可き空費中の空費である。草や銅が失はれると云ふことの如きは、此の靈魂上の珍寶の失はれると云ふことに比ぶれば、眞に些々たる事で、尤

の空しく棄て去らるゝ、靈魂上の珍寶が適當に節約して用ひらるゝことになると、滿天下をも楽しきものと爲すことが出来るのである。

### 救濟の籠

ブルックリンで、僅に二年六箇月の女の兒が、ほんの一寸の間、窓の開ッ放しに爲てあつた處に一人置かれて居つたので、四階の貸間の窓臺に這ひ上ツて、落ちたのである。然るに、洗濯物を干したりする爲に、彼方此方に立てゝある棒から窓々に綱が引張ツてあつたので、落ちた女の兒は、此方の綱に打ツつかり、彼方の綱に引ツ懸かりして、割合に手間取ツた。恰も好し、下では一人の婦人が著物を干して居たのであつたが、此の落ちるのを見ると、突如大聲を揚げた。が、恐いとは思つたに拘

はらず、咄嗟に心を定めた。彼の女は著物籠を取上げるが早いか、跳り上ツて、其の嬰兒を無事に受け止めたのである。

○人が足場を失ツて、將に災禍に陥らんとするを見出でた時、之を救はんが爲に、手を差出して救濟と云ふ籠を其の中に置いて遣る術を考へ出すと云ふことは、必要な事である。

### 小兒の知覺

ナンセン博士が彼の有名な北極探檢の途に上つた儘、長い間杳として消息を絶つた。此の時に當ツては、無論生死の程も明かではなかつたのである。で、夫人は、心配の餘り精神に異狀を呈するに至つた。家族の者は、相警めて、夫人の前では博士の名を呼ばないことと決めた。が、善惡ないお嬢さんを如何して言はせないやうにするかと云ふ問題

には、非常に困ったのであった。お嬢さんは絶えず父博士の事を言ひ出し度<sup>た</sup>がッて居たのであるけれども、子供ながらも阿母<sup>おつかさん</sup>の前で阿父<sup>おとうさん</sup>の名を言ひ出すのは、其の病氣を悪うするばかりであると云ふ事が分るやうになつた。かくて、家族の者の苦心慘澹も功を奏した譯<sup>わけ</sup>であつた。一月又一月と時は経<sup>た</sup>つけれども、可憐のリップ嬢は、健氣<sup>けんき</sup>にも約束を守ッて、博士の名を呼ばなかつた。處が、或る朝、花園で阿母に遇ふと、突如<sup>いきなり</sup>喜びに走ッて行ッて、

『阿父<sup>おとうさん</sup>は歸りますよ。阿父は歸りますよ。』

と叫んだ。紅涙も悔恨も子供には何の効もなかつた。が、何たる不可思議な事であらう、リップ嬢が信じて疑はなかつた推定の後、六時間を出ないのに、早くも、ナンセン博士の一行は無事健全に諾威<sup>ノルウェー</sup>に上陸せりと云ふ電報が全歐洲に傳はつたのである。勿論<sup>もちろん</sup>此は興味ある偶然の一

致に過ぎなかつたのであらうが、精神作用に於ては、子供の知覺力と云ふものが甚だ鋭敏なるのである事は分ッて居る。

○吾人は須<sup>すべ</sup>らく此の子供らしい心に立還<sup>たが</sup>らなければならぬのである。基督が、崇拜家の模範<sup>もてま</sup>として子供を選択せられた事、并に彼のみが、吾等の上に賜ふ其の恩恵を享けんが爲には、子供の精神で彼の許<sup>もと</sup>に行かなければならないと宣言せられた事には、深遠なる意味があるのである。

## 未來の友

リップチヤード・チー・グランドは、一時は中々盛名ある作家であつた。が、孤獨の恨、斷腸の思を懷きながら、ニュー・ヨークの一下宿屋に死んだ。彼が辭世の詩は、遺稿中に發見せられた。彼の死と併せ考ふれば、句々

涙の種子ならぬは無いのである。

『人の忘れ去りたる或る時に、

人の知らざる或る國に、

親近の者一人も持たぬ

一人の男住みしが、

其の一生の小やみなき、

單調の憾は、

胸の調和と

相容れざりき。

友情の黄金なせる

鎖のつなぎに、

飢ゑたる如き心を

切に繋ぎ留めしも、

つなぎつなぎは何も、

堪へ難き苦痛を齎しぬ、

うはべの友を

信なしと見出でしなれば。』

○此の如き落莫の一生を送る者が有るかと思へば、無限の悲哀を感ぜざるを得ない。若うして早く基督を以て友となす者は、年老ゆるも彼の忠實なるのみならず、他の多くの相慰愉する交りを紹介し給ふことをも見出すであらう。世の青年士女よ、願はくは脚蹠逡巡して此の神聖なる老年時代の主なる慰安と爲る可き友情を結ぶことを怠つてはならないのである。

## 那翁と堇花

堇花は、一時大ナポレオンの友人が徽章として著けたものである。それには、由緒がある。ナポレオンが將にエルバ島に向つて佛蘭西を去らんとした日の前晩のことである、彼は、友人に斯う言つた、

「朕は、堇の花の咲く時になると、歸つて來れるだらう。」

偶然の言葉に過ぎなかつたのであるが、此の一小句が同情を得たことは、夥しいものであつた。此の花は、男女の別なく、ボナバルト黨の人々に、徽章として用ひられたのみでなく、直に堇花色のリボン、堇花形の珠玉細工が、彼等の感情を表はす爲に使はれた。ナポレオンの肖像畫を賣ることが法令で禁止せられるやうになつてからと云ふものは、ナポレオンの友人は、一束の葉ぐるみの堇花を按配して、其の輪廓でナポレ

オン、マリールイズ、又は皇子羅馬王の外形が譯無く繪取られるやうな繪紙を發行して、巧に禁令を潜つたものである。

○苟くも、基督信徒たる者は、何人と雖も、基督信徒たる旗幟を鮮明にすることを忘れてはならない。基督は、俯仰天地に恥ぢざる公明正大の弟子たれと、吾等に喚び給ふ。されば、少しでも之に及ばざる者は、基督の血汐に依つて贖はれた者としての資格が無いのである。

## 雪下の花

西比利亞を旅行した者の談に據ると、不思議な花もあればあるものである。其の花と云ふのは、三冬も極寒の頂上である正月でなければ、咲かない。一日しか保たないので、朝顔の特色らしい點を幾分か有つ

て居るのである。アントスジョンと云ふ露西亞の一貴族が其の種子の若干をペテルブルグに持ち歸つて、氷雪と凍土の入つて居る瓶の中に蒔いた。すると翌年正月の一番寒い日に、其の奇異な花は、氷の底から萌え出で、獨特の美を發揮して、學者達を驚かしたのである。

○基督に懸ける希望は、此の雪底の花のやうなものである。諸君にして、若し之を運び去つて、四周悉く異郷讐敵たる邪教徒の胸底に置くなれば、基督信徒の國に於けるが如く、同じ美しさと薫りとを放つて咲き出づることであらう。

### 缺く可からざる人

英國で女王の大歡祝賀式が舉行せられた間、エクスターの僧正が書いた頗る激勵的な詩が、熱烈な演説の終りに、カメン・シリミングに依つ

て吟誦せられた。其の詩が熱情を喚起したことは、非常なものであつた。題は、『吾等に人を與へよ』と云ふのであつた。茲に其の一節を引用する。

『吾等に人を與へよ。

強く勇ましき人よ。

いと高き希望に奮ひ起てる人を。

いと清き名譽に奮ひ起てる人を。

人を先にして己を後にする人を。

祖母の光榮を中外に發揚し、

氣高き子として、

父の名に背かざる人を。

母を恥かしむること無き人を。



兄弟を誤ること無き人を。

縦令他人はさらすとも、唯眞の道を守る人を。

吾等に人を與へよ、再び言ふ、

吾等に人を與へよ。』

### 黄金の墓

印度は黄金の墓と稱せられて居る。長流一瀉滾々として其の國に入ッて断えないのであるが、遂に満潮の時がない。錢が再び印度の諸銀行に顯はれることがない。何故であるかと云ふ問題は、随分難しい問題であるけれど、斯うしか解決がつかない。印度は、世界の一隅で、今に蓄藏と云ふことが大部分に亘ッて行はれて居る。天晴の大君達の中には、多數銀行に寄託すると云ふことをする程英邁になつた方々も

ないではないが、まだまだ寶庫の中に珠玉を鑿めた偶像を列べたり、御居間に黄金の器皿を並べて楽しむと云ふ野蠻的な風が遺ッて居る。斯う云ふことよりも、まだまだ看過すべからざることとは、平民などになると、銀行を利用することをしないで、此處に一ルビー、彼處に一ルビーと云ふ鹽梅に、錢を隠して置くだけである。印度では毎年、幾千萬の人が毒蛇野獸の爲に殺される。勿論、天變地異に由ッて不意に死ぬるものもある。こんな風で、隠した人は死んで行くのであるから、彼等以外には誰にも知れない隠し場所に蓄藏せられて其の儘になるものが、随分と澤山あらう。さう云ふ譯で、彼の小寶物は、永久二度と顯はれないで済んで了ふ。此の蓄藏の風が印度を富ましめなないで、何時までも貧乏たるに甘んせざるを得ざらしむるのである。

○基督の仰せられた、

『其の生命を保全せんと欲する者は、却つて之を喪ふ。』  
と云ふ語を説明するには、此の以上適切な好例はないのである。

### 耳を開け

詩人のジャン・インゼローに關して面白い談がある。彼の女が嘗て數人の友と田舎に滞在して居た時のこと、四方山の話のうちに、反魂鳥オウチンゲルのことを何度も書きはしたが、未だ曾て一聲も聞いたことが無いと言ひ出した。で、一夜、一同は、之を聞かんが爲に、特に月夜を擇んで出掛け、すると、反魂鳥は、聲いと美しう稍、暫く啼いたのに、インゼロー嬢が斯う問ひ出したので、一同は驚いた。

『啼いて居ますか。妾には何も聞えませんが。』  
畢竟女詩人は、隙漏る風をも痛く恐れて居た位であつたので、其の夜出

掛ける際、耳に綿を詰めて居たのであつた。

○そんな風に、多くの人は、耳を開いて居ない爲に、勇氣を喪へる者を慰めよ、世間より顧みられない者に福音を傳へよ、と呼び給ふ神の御聲を聞き落すのである。

### 猫と水

或る動物の習慣に就いて研究して居る博物學者の言に據ると、多數の動物は、長期間水なくして生存し得ると云ふ證據は澤山あるが、此の禁戒は、自爲的のものでなくて、過度に長く水を飲まないで居ると、苦惱を起し、健康を失ふに至るものだ相である。大抵の人は、猫は水を欲しがらない物であると思つて、決して水皿を供へない。此は誤である。猫も虎や亞米利加虎のやうに、渴しては水を欲しがらる。猫が卓上の花

瓶を引覆したり破壊したりするのは、多くの場合、悪戯に歸すべきものでは無く、花の挿してある瓶の水を飲まうとする猫の努力に歸すべきものである。

○基督は、福音書の中に、特に天恵として擧げて居る其の中に、飢と渴とを入れて居る。人たる者は、無益に『生命の水』を渴し求める要はない。欲する者は、何人でも、來つて自由に取ることが出来るのである。

### 基督の知己

獨逸皇帝が、或る夕、長時間の散策をせられて、ポツダムの宮殿に歸還しようとしてせられて居たが、頗る疲勞を感せられたので、馬車は無いかと四方八方を見渡された。けれど、目に入つた車は、唯一臺の農用の荷

車で、それには一人の百姓女が乗つて居た。別に之と云ふ乗物もないので、皇帝は、之に乗つてポツダムに歸らうと決心せられた。で、其の女に向つて席を興へよと、求められた。すると、其の女は、何方かと言ふと疑はし氣にちろく、視て、塵に塗れて居られるのを見ると、其の荷車に乗せることはならんと、むきになつて斷つた。

『妾は、彼の風采が氣に入らん。あんな者を傍に置いては油斷がならん。』

と、聞えよがしに喋言つて、馬に聲を掛けて速歩にした。百ヤードも行ったかと思ふと、一人の兵士が彼の女を停めて、

『陛下は、お前に何をお頼みなされたか。』

と問うた。百姓女は、

『何ですと、頓とお前さんの言ふことが解りません。』

と答へた。で、其の兵士が、彼の塵塗れの士官をお前は御無禮千萬に御取扱ひ申したが、彼の御方こそ誰あらう、辱くも獨逸の天下を知ろし召す皇帝であると語ると、百姓女は震ひ上ツて怖がり、馬に鞭を呉れて、一目散に駆け出させ、忽ち暗に影を没したのである。

○基督が勞苦困憊の塵に塗れた衣を身に纏うて顯はれなされても、自失して、優しく手を出すことを忘れるやうな事が有つてはならないから、常に用心して居なければならぬのである。

### 黄金の色

一人の佛蘭西人が、巴里から北米合衆國に行ツて、大災難に遇つたことがある。其の佛蘭西人は、彼の全財産である一萬法フランを持ツて行ツたのであるが、下宿屋で一人の愛想の好い西班牙人に遭つた。すると、

きに其の西班牙人は、其の佛蘭西人と懇意な間柄になつた。そして、煉瓦状の金塊を擔保にして、其の佛蘭西人から金を借り出した。間もなく、西班牙人は何處へ行ツて了つたやら、姿を隠したのである。で、佛蘭西人は、其の金塊を寶石屋に持ツて行ツて、鑑定して貰ふと、純金とは眞赤の嘘、銅と錫と亜鉛との合金で、金は一分子も含有しては居なかつた。全く騙詐に罹つたと云ふことが分つた時の、其の哀れな佛蘭西人の失望落膽と言つたら、見るも氣の毒千萬な有様であつた。

○けれど、世間之と同様の手で、詐られる者は、頗る多いのである。男女の分ちなく、皆先々幸福平和の基にでもなりさうに見える、燦々と光ツて居る、蠱惑的の寶に、惜むべき時と才とを擧げて、喪心して、いざ實現と云ふ時になつて見ると、物にもならぬ合金に過ぎないのである。斯くの如くに、一種の詐偽に罹つた多數の人は、人生

は生活の價値なきものであると叫んで居るのである。そして、新聞は、毎日毎日、一度失敗しても、驟然崛起し得るの勇氣を缺けるが爲のみに、罪とは知りながらも、百年の壽命を葉上の露と碎いて了ふ人々の事を報道して居る。されど、眞に人生の意義を知つて居る者は、誠實の心を以て神の意を行ひ、常に自ら樂む所以のものを求め、人生を以て欺騙など、思ふやうなことはない。さう云ふ風な人は、皆人生を以て生活の價値あるものとなし、消ゆることなき光榮の寶冠と共に、天をも併せ有することを信じて居るのである。

### 北極の花

カリフォルニア州の博物學の大家ジョン・ムイア氏の主唱する所に據れば、大陸中で一番の塵汚のない自然の花園は、アラスカの曠々たる

苔原であると云ふ事である。毎年夏になると、其の苔原は、一望平滑で、北緯六十二度の邊より北極洋の沿岸に至るまで、一面波狀の起伏をなせる花葉の床である。長い白い冬の間を通して、毳毛のやうな雪の下に甘き睡を結んで居たのが、春になると、丈高く伸びようともせず、中には高く伸び出でて、風吹くなべに、さらさらと漣の如き音立て、波の如く揺ぐものもないでは無いが、美しい花を著けて、茲に現じ出す地上一面の黄、紫、碧の色々、其の華やかなること、宛然虹の床を運ねたやうで、何處を見渡しても、渺々たる花の廣野であるさうである。

○神の子たる者、常に義務の道をさへ踏んで行けば、誘惑の充てる所もなく、將た正義に抵觸する所もなく、靈魂の美德、花と咲き出でて、四周に雲集する邪惡をも叱咤し掃除し得るやうに爲るのである。

## 背教者の愁

クナード汽船の一船員の談に據ると、歐羅巴に歸ッて行く下等船客と亞米利加に來るそれとの間には、非常の懸隔があるさうである。西航移民の顔は、豫想と希望とで輝き渡ッて居る。中には、疑ひもなく、新陸土を夢想しつゝ、夜も眠らない者も少くない。海の此方こなたで成功した友人が親族かが彼等の爲に描いた薔薇色の幻影に鼓舞せられたのである事は、言ふまでもない。引き拂ッて歸ッて行く者は、多くはないが、意氣沮喪せる其の顔貌かほづつで、直指し示すことが出来る。彼等は、成功しなかつた者共である。彼等は、合衆國でも歐羅巴に於けると同様、遣ッて行くには精々せつせと稼がねばならない事を見出したのである。けれど、其の移民の大多數は、踏み留まッて居る。

○失敗したが故に歸ッて行く人達の悲しげな顔相かほづつは、基督教的本務より背き去ッて、世の罪業に歸ッて行く人の胸に抱ける暗鬱あんうつな心の好例である。

## 十字の御旗

戦争と云ふものの有ツた爲に、随分面白い事が澤山起ッて來たが、就中旗に關しては興味ある事が非常に澤山生み出された。白旗は、平和の事である。戦闘が終ると、敵味方の兩軍から若干の分隊が戰場に出て來て、白旗の保護の下に、負傷者を收容し、戦死者を埋葬くわいすることが數々ある。赤旗は、招挑の章で、又屢、革命黨の使用する所となる。北米合衆國の海軍では、危険の記號で、船が其の火藥の受け收め、中又は荷卸中なることを示す。黒旗は、海上搶掠の徵である。黄旗は、交通禁斷期間

の船舶なることを示し、傳染病のある事を示す章である。半橋旗は弔意を示す。合衆國大統領乗船の時には米國國旗が其の乗艇の船首に立てられ又座乗船の主橋に掲げられる。

○吾等基督信徒の旗は十字の御旗である。抑教會の世界到る處に在るのは、靈魂を救はんが爲である。で、苟くも教會たるものは、其の御旗を撤下してはならん。夏又冬、週日又日曜、十字の御旗は、常に基督の弟子等に依つて、空高く翻されねばならないのである。

### 酔へる蜂

或る種類の花に在る蜜は、蜂を酔はす力を有して居ると云ふ事である。抑、蜜も亦酒精に變せしむることが出来る。上代の英國に於ては、他の國と同じく、其が酔を目的とする主なる飲料の本であつた。如何

かすると、蜜は、花の中に在る儘で變化することがある、と信せられて居る。醱酵素は、もと／＼空中に浮漂して居るので、蜂の食料をなす蜜壺の中に沈下することがある。かくて、甘い汁が酒精に變ずる。で、蜂は、其處に路傍の酒家を見出すのである。

ジアン・インゼローは、之を知つて居たと見えて、斯う歌つて居る。

『蜂の幾群、クローバの花に酔ひたる。』

キーツも亦斯う書いて居る。

『蜂酒の清きに充てる忍冬。』

エドガー・アラン・ポーは、セファリカの碧い花に酔はす力のあることを語つて居る。

『狂亂、將た常ならぬ銘酏の  
刑を蜂に課しつゝ、そは今も残れり。』

○亞米利加の市民が最も甘しとする蜜は、自由で、彼等は、之を束縛なき制度より吸ふのである。が、其が一度醗酵して、放縱に變ずると、忽ち文明を根柢より危殆ならしむる致命的強酒と化し了るのである。

### 基督教的の生活の香

英國のエリザベス女皇は、非常に花を愛された方で、冬になつて野や園に在る草木の花が凋落する時は、女皇に取つては、此の上なき愁歎であつた。辱くも此の花を愛しなされると云ふ事から、世界で一番有名な花園が起ることゝなつたのである。客室に用ふる花を作らんが爲に、女皇御手づから土をいぢられた。女皇は、實に自己一人の満足の爲に花を作り始められたのであつたが、終には千萬の人の爲となつたの

である。猛激な性格の女皇も、随分澤山歴史上に現はれては居るが、其の願望は、一つでも好果を齎したことがない。然るに、エリザベス女皇の小花園は、今日の英國國民の誇りとする所である。其の王室の王卓の上を飾らんが爲の切花を作らうと云ふ根本の目的は、今も尙ほ見えては居るが、其はキューガーデンの附隨的の一小特色たるに過ぎない。花園は、國民に屬し、無智文盲の貧人も、博學多識の富者も、其の香高き花、其の風致ある樹、其の人を慰むるに足る草木を樂むことが出来るのである。

○基督教的の生活も、其の通りでなければならぬ。吾等日々の義務を盡しつゝ、不知不識幽香を放ち、吾等が人生の重荷を擔ひ行く所以の勇氣を以て、他人を鼓舞しなければならぬ。吾等無意の勢力は、吾等有志のそれよりも、大なるものである。誠實なる基督信徒になると、自ら爲なさんと力めずし、而かも善を爲すことが



頗る多いのである。

### 切花と性格

倫敦の如き大都府に供給する切花の量は、非常なものである。コベント花市場の一商館の如きは、時によると、一週間に十五萬弗の切花を賣捌くことがあるさうである。此の人類の大中心に集まる花の供給に關しては、興味深い點が澤山あるが、其の一つは、大部分外國から、而かも小百姓の處から集まッて來ると云ふことである。花籠は、晩に佛蘭西の南方を出でて、二日の後には英國の早朝の市場に出るのである。つまり、此の花は、大抵勤勉な佛蘭西の小作人共の作ッたもので、各戸其の手入れの善き花壇から二三籠宛を送り出すに過ぎないのである。

○人生も、多くの點に於て、そんなものである。性格の美と香とを

造り上げるものも、小さい物事からである。基督教的の男たり女たるの特色は、小さな制欲や、小さな抑我や、單獨に見れば無意味であり、さうな行爲から起るのである。が、其の聚合體は、即ち彼此變りこそなれ、基督教的美德の清香馥郁たる性格となり、生活となるのである。

### 小兒と獅子

キヨミミング州カスパー山上の一牧羊者が、或朝未明に、假舎に睡ッて居た妻と二歳の幼兒を残して、平生の如く羊群を追うて出て行ッた。が、朝食をする爲に八時に歸ッて見ると、妻はまだ熟睡して居たのに、嬰兒の姿は見えなかつた。畢竟、眼を覺して寢衣の儘途迷ひ出たのであつた。取り敢へず搜索を始め、其の跣足の跡を辿ッて行くと、彼此一哩

も離れて居る泉の處に出た。泉の近くには、巨大な獅子の足跡も、目に入つた。嬰兒の行衛は、此處きりで何の手掛りもなかつたのである。

○吾等が都市の小兒は、大抵獅子の間に迷ひ歩く幼童と等しいものである。然るに、多くの親達が、之に頓着もせず、又は保護の道を誤つて、睡つて居る間に、小兒等は、遠く迷ひ出で、終に非業の最期を遂げるのである。讚美歌の作者は、一の恐るべき患難の場合を歌つて、

『わが魂は、群れ居る獅子の中にあり。』

と言つて居るが、保護者の不注意よりして、兒童を獅子の口中に迷ひ入らしむると云ふのは、悲むべき事ではないか。

## 難破船

一千八百九十七年の一月、大英國の一帆船がピール岬に近きバンクーバの海岸で、恐るべき危難に遭遇したことがある。四日間も、船長は、濃霧の爲に、月も星も見なかつた。或る日の午後、彼が航海を繼續して居ると、忽ち、『行手に暗礁が！』と叫んだ聲が耳に響いた。此が船の危険なる位置に在ることを報じた最初の警戒であつた。恰も其の時、海は荒れ狂うて、船を風上に出さうと試みたが、其も無益であつた。で、錨は悉く卸されたが、大きな船がくるく／＼回轉するので、一本の鎖は斷れて了しまひ、船は海岸を離るゝ、一百呎以内の處に懸つて居て、残りの一本の鎖も將に切斷せんとする危険に陥つた。巖礁に打ぶつかつて空に上る波は四十呎に達し、見たところ如何どうしても船體を救ひ得る見込が無かつたので、終に小艇を卸して海岸に達する企を決行することゝなつた。數隻の小艇が卸された。が、卸されると一緒に顛覆して了しまうた。で、今

は已むなく、船員合計三十三名は、巖に激する浪を漕ぎ切つて、無事に避難した。一同は、小艇を覆して、其の下で夜を明かした。朝になると天氣も穏で、驚く可し喜ぶべし、船は依然として昨日の處に碇泊して居たので、船員一同之に乗り移り、直に帆を揚げて、危険なる位置を遁れることが出来たのである。

○難破して岩礁に乗り上げたと云ふだけで、折角行り掛つた事を中止してはならない。再び福音の船に乗つて帆を揚げよ。ピーターは、實に難破の後、其をなしたのである。そして神は、彼を天の港に伴れ來らしめんと、大衆を降し給うたのである。

### 人生の潮流

吾等が神と共に平和の境地にある時は、人生の潮流とも調和して居

るのである。そして、一切のもの、悉く吾等の善を助長するのである。近時復活した頗る奇妙な學説に據ると、生木の汁は、海洋の水に伴れて、一種の干満作用をやるさうである。此の觀念は、以太利から來たもので、其の國に於て葡萄等の果樹を栽培する人で、又化學者である人が、此の點に關して實驗したのである。其の人の言ふには、總て樹木は、満潮の時以外、曲げたり、刈り込んだりしてはならない。此の結論に到達したまでに十四年を費したのであるが、今では常に之を實行して居る。其の結果、葡萄等の果樹の花葉繁茂して、果實も亦美しく、四邊の果樹園を荒らす昆蟲の來襲を受けるやうなことも、全然無くなつたさうである。

### 眞の禮讓

日常生活の稜角たる稜角を圓滑ならしむるもの、禮讓の美德に優るものはない。禮讓の美德は、堅固にして健全なる性格に基き、無上の美を發揮するものである。

革命時の大將ナサニエル・グリースの曾孫マーサ・リットル・フィード・フィリップスがワシントンに關して、至極興味深い、餘り誰も知らない談話をして居る。十二月の或る朗かな朝のことである。早く一人の道化めいた田舎翁が大統領に面謁を請うた。對談の最中、朝餐の鐘が鳴った。すると、本來ワシントンは斯う云ふ風な時に於ても、客好きであつたから、其の老人を誘うて、相並んで食卓に就いた。來訪者の老翁は、自分の珈琲を碟の儘で飲んだが、それでも、まだ雪のやうに白い模様、淨織の卓布を汚すやうなことがあつてはならんと思つたのであらう。戦々兢兢々として、碟の縁で茶碗の底を擦つて、卓布の上に置いた。音

のする程に爲つたので、外のお客の注意を引いた。ところが、其のお客の中には、場合さへあれば笑ふに抜け目のない若い人達も居たのであつた。此の若い人達は、不謹慎にも、此の様を見て失笑したのである。そして、其が人の目に著くやうになつた。すると、大將ワシントンは自分でも、直、老翁の眞似をして珈琲を飲み始め、老翁が立てたよりもずつと烈しい音を立てた。で、忽ち若い人達の笑癖が止んで了つたと云ふことである。

## 蛾と罪

四十年の昔、或る佛蘭西の博物學者が、米國にジブシー・モッスと云ふ蛾を一握ほど科學的實驗に供する目的で、持つて來た。其の蛾の若干が逃げた。それを直捕つて了へば、容易く撲滅することも出來たので

あつたらうが、州の當局者は、往昔二十箇年も不問に附して置いた。が、其の與へる損害が莫大に爲つて來たので、愈之が撲滅に取り掛かることとなつた。すると、驚くべし約十箇年前までに、其の一握の蛾が非常に繁殖して、マサチューセツツ州だけで、之が撲滅に七十萬弗の經費を要し、全然之を撲滅して了ふには、更に少くとも一百万弗の巨額を要すると云ふことであつた。

○邪念の倍蕪し、惡習の成長することも、亦其の通りである。邪念も、直に之を追ひ拂へば、容易に出来るのである。然るに、心に深く巢くふことを許して置くと、忽ちに其の勢力を倍蕪して、又如何とも爲し難きに至るのである。

### 勇敢なる巡查

ニュー・ヨーク市の第三列樹街で、一頭の馬が二輪車を曳き擦つたまま、逃げ出して、既に數人を傷つけた。が、壞れた車が足に打つつかると、愈、狂ひ廻つて、終に猛然として、行人織るが如き市中に突入した。會、ジョンズと云ふ巡查が、此の奔馬を見るや、突如、身を忘れて之を停めようと決心した。彼は、直ちに進路に立ち停まつて、馬が傍を走り過ぎんとした時、忽ち身を斜に躍らして、飛び付き、兩手で確乎と絡頭を掴んだ。其の早速の働を見た者は、訝然として大息をついた。目撃者は、皆其の巡查が馬蹄の下に蹂躪し去られると豫想したのである。奔馬は、巡查の重い體を懸命に振り落さうとしたけれども、巡查は、ぶら下つて居て手を離さなかつた。彼は、かくて、曳き擦られたまゝ、橋を渡つてハーレム河岸まで行つた。すると、彼の重さの方が勝を制して、馬が餘程おとなしくなつた。彼は、徐ろに手綱を引いて馬を停めようとした。見て

居た者は、走ッて行ッて之を助けた。が、巡查は、氣力を消耗し盡したので、其の征服し得た動物の足下にはッたり落ちた。嗚呼、彼の敏速果敢なる豪勇の性は、疑ひもなく、數人を救ひ得たのである。

○其は、恰も、吾等が燥暴にも向ふ見ずに疾驅して廢頽の境に入らんとする道に當ッて、基督が身を挺して之を救はうと爲給うたやうなものである。そして、基督は、蹂躪せられて死に給うたけれども、死と墓とに打ち勝ッて、永久に甦へッて、改めて、哀れなる罪人の爲に熱誠し給ふのである。如何なる時にも、ジョン・ハワード、又は、ウイリアム・ロイド・ガリソンの如き男性、ドロシー・アリックス、フロレンス・ナイチンゲール、又はクレラ・パートンの如き女性が居て、基督の精神を體して難に殉じ、一見向ふ見すのやうな犠牲の心を以て、人生の荒廢を阻止しようとして爲て居る。さる英雄的人格が、基

督の精神を體すれば、それで其の時代々々の救世主であるのである。

### 凍らぬ泉

先年アラスカの山中で、年中水の温い湖水が発見せられた。湖水の水が冷たなくなッて、溶びることが出来る位であるから、魚は、幾何でも苦もなく捕へることが出来る。此の驚く可き湖水は、海洋から數百哩も隔ッて居て、兩者の間には、見たところ、何の聯絡もないやうである。然るに、潮の影響を受けるので察すると、何か地中に通路があッて、海と聯結して居るやうである。セラウイック湖と云ふ名は、其の発見者であるゼイトト宣教師フアーザートシが命じたので、其の宣教師は、多年内地に入り込んで、アラスカ印度人の間に布教して居た人である。

○北極と言ッても可い位な寒地の中央に在る此の温い湖水の如く、基督教は、温情と好樂と凍ることなき希望とを噴出する泉で、實に世界の罪業と絶望との寒冷此の上ない大氣の中央に、生命と愉快とを散らして已まないものである。

### グラッドストーンの勇氣

現代に於ける崇高なる道德的勇氣の好例としては、グラッドストーン氏の場合に優るものは有るまい。氏は其の意見を變ずるの勇氣を有したのみならず、其の意見を變じた時、直ちに其の新なる光明と知識とを斷行するの勇氣を有して居たのである。爲に、政治的交際の上、不利を起したとさへある。又之が爲に、屢、不定見であるとの誹謗も受けた。氏自ら言ッたことがある、それに依ると、氏の全經歷の秘密は、

斯うである。即ち、氏は、自由と云ふものは、恐るべきに庶幾いものであると信するやうに教育せられたのである。が、世に出づるに及んで、漸次、人間の自由に對して、廣い廣い信念を有するやうになつたのである。○世間には、自ら太らし過ぎた古い過誤を抛ち去るの勇氣を有しない者が頗る多い。注意す可きである。

### 習慣の力

或る消防夫が、課を碎いて、病院に擔ぎ込まれた。そして、燒石膏で片足を包定せられた。ところが、其の病院の一所の廊下に鐘が懸ッて居た。其の鐘と云ふのは、其の市で火災があると、直之を打ッて同院に警報を傳へ、危険の際には、役員をして、直ちに患者を相當に處置させようと爲るのであつた。此の鐘が、丁度其の消防夫の病室の前に在つたの

である。すると、或る晩、彼は早くから居睡りを始めて、九時頃に爲ると、消火夫のよく行るやうに、ぐっすり睡込んで了つたのであつた。折柄、市内の或る箱番所で、其の區の消防夫を召集する爲に警鐘を打つた。其の第一打の鐘聲を聞くなり、居睡りを爲て居た消火夫は、忽ち目を覺し、第二打の鐘聲も鳴らざるに早くも、床から飛び出して、よく開き切りもしない兩眼で、消火夫が下階に滑り込む時の用に供する桿を探した。勿論そんな物が病院に在らう筈も無いが、手が自分の床の鐵の棒に觸るまで、滅法矢鱈に碎いた踝で歩き廻つたのである。手が鐵の棒に觸るや、彼は、腕を其に懸けて、一生懸命に兩脚をも其に懸けようとした。が、床に墜ちて、復た折角經過も良好に爲つて居た踝の骨を碎いて了つたのである。

○習慣の力が如何に強いものであるか、其を證するには恰當の適

例である。人が爲し馴れた事は、第二の天性と爲るのみならず、第一の天性とも爲るのである。而して、此の如きは、惡習慣の場合と同じく、又善習慣にも其の通りで有るのである。

### 愛の爲に

ブルックリンの法廷で、判官と囚人との間に、斯う云ふ問答が爲された事がある。

判官は、長い間熱心に囚人の顔を見て居たが、  
 『——お前は、盗人などと云ふ罪人らしくも無い。本職は、お前の掛りで取調も爲たのだ。お前には、是まで哀訴して出た氣立の善い姉が有る。情人も有る。其の婦人も亦、お前を特別に寛大な取計を爲て呉れと願ひ出た。お前は、無論結婚の約束を爲たのだらうな。』



『左様で御座りまする、閣下。』

若い者は、啼嘘しやくりないた。

『幾何位前に約束したのだ。』

『一年と二箇月で御座りまする。』

『宜しい、——お前が今度から正道に歸ると約束するなら、本職は、お前の情人の爲に、宣告を見合すことに爲よう。』

○愛は、宇宙の魔力である。『神は愛である。』故に、愛の精神が、吾人の生命を左右し支配する時、最高度の力は、吾人に附くのである。

吾人若し愛の爲に盡さば、何物も吾人に對抗することは、出来ないのである。

### 人格の尊嚴

或る有名な海軍の技師が、獨逸皇族の或る方の處に客と爲ったことがある。そして、其の主人役の宮様と散歩に出掛けたところが、見ると、自分の歩いてる方の道が平で、足も運び易いやうであるものだから、左方から右方に變った。それが世間一般の作法と思つたのである。すると、出會ふ名士連は、皆頗る鄭重に宮様に會釋を爲ながら、技師の方をじろく見守つて、如何にも魂消たやうな解せないと云ふやうな顔つきを爲て居た。暫くすると、宮様が、

『貴方が右の方に變られてから後は、出會ふ人も出會ふ人も、皆驚いて貴方を見るが、其れを御氣付きでしたか。』

『左様で御座りまする。』

と答へて、技師は、其の位置を變へた所以を説明した。

『あゝ左様、左様でせう。』

と宮様は笑ツて、

「では皆が何故貴方をあんなにじろく見るか説明しませう。高位の人が右側を占めると云ふのは、獨逸宮廷の定則です。途中で出會つた人達は皆私を知ツて居ます。けれども、貴方が私の右の方に居られたものだから、貴方を何處かの王様であると思ひ、抑も誰であらうと怪しんだのであります。」

○此の話は、吾人が相共に行かんとする人々を選択するの肝要なること、及び吾人が人生に於て占む可き立脚地に關して注意すべきことを暗示する。若し一人の人が基督の傍に立ツて居て、公共の正善に關する一切の問題に彼と運命を共にするなら、基督の幾分かの光榮は、其の人の人格に尊嚴を増すに違ひないのである。

### 俗世の財寶

或る男が、ニューヨーク市の火事で、馬鹿げた事で生命を亡くしたことがある。其の男は、妻と二人世帯で四階を借りて居た。火は、其の借間の勝手元から發つたのである。同じ四階に住んで居た一人の女が、燃え出したのを見付けて、喫驚して大聲を揚げたので、借家人は眼を覺した。見ると火は既に凄じい音を立て、通風筒のあたりを焼き、煙は濛々として、部屋部屋に一杯に爲ツて居た。警部が夫婦の部屋のあたりへ行ツて見ると、驚く可し、妻が懸命に爲ツて、其の男の上を思つて引き戻さうと爲るのに、如何しても其の男は、引返して行かうと爲るのであつた。で、警部は、其の女に加勢して、男を家の外に押し出した。暫くしてから、四五人の消防夫が天窓を抜けて、水管を曳き上げようと爲て

居ると、其の馬鹿な奴は、著て居る著物が、大略焼け落ちさうに爲つて居るのに、まだ自分の部屋のあたりに徘徊まごついて居た。畢竟、これまでに爲した書類を取出さうと思つて、復た引返したのであつた。よしんば、取出し得たと爲たところが、自分の掌上で燃えさして了ふだけのものではあつた。果して書類は出したが、生命を亡くして了つたのである。

○世間には、一生を貴重ならしむる所以のものを悉く亡くしても、浮世の財寶を手離すまいと爲す者が甚だ多い。彼等は、やがて失はなければならぬ所得を保留しようと思つて、魂を失はんと爲るのである。

### 渴土サイストランドの悲劇

英國の大畫家ミレーズの辭世の作は、『最後の宿り』と云ふ繪畫で、其の

原圖は、版刷である。此作は、ミレーズの傑作中の一で、彼の天才が遺憾なく發揮せられて居るものだとの定評あるだけに、其の簡單な描線の中に、自ら崇高な感情、圓滿な技巧が現はれて居ないものは、一つも無い。抑も此の畫題になつた譚は、亞弗利加開拓者の間では、誰知らぬ者も無い位な有名な譚である。或る一人の白人が、沙漠の烈風をもともせず、幾春秋の間危険を冒して、草原に狩獵を行つて居たので有つたが、終に亞弗利加の春季に於ける瘴癘の氣に觸れて、將に荒涼落寞たる「渴土」で死なんとする事になつた。そして、其の呼吸を引取るまで傍に侍して居るものは、忠實なるズールー人で、其の主人に對する愛は、父に對する子の其それに劣らないのである。見渡す限り未だ嘗て白人の足跡を印せざる廣野で、鳥獸さへ此の見も馴れざる人達や四圍あたりのものを訝つて、ぢつと立停まつて居る。

○此の畫に描かれて居る南亞渴<sup>サウスランド</sup> 土の悲劇は、人の世に於ける渴土の悲劇を暗示して居る。傍に侍する者もなく、看護する者もなく、生命の水の缺けた爲に、魂は空しく飛び行かんとするのである。

### 自繩自縛

博士ヘンリー・バンダイクは、其の一詩に於て、何人と雖も、現に吾人を害ふものは無い、害ふ者は吾人自らであると云ふ大眞理を、誰にも分り易く、美しく説いて居る。魂を縛る現實の鎖は、自ら造つたもので、之を救脱するは、吾人を吾人の罪に漬れて居る自己から救ふ彼の聖愛<sup>聖愛</sup>に依る外は無いのである。其の一節に曰く、

『己<sup>おのれ</sup>こそ、魂を絆ぐ』

唯一の牢獄なるなれ。

愛こそ、門を開かしむる

唯一の天使なるなれ。

天使來つて汝を呼ばい、

起ちて疾く從ひ行けよ。

其の途、闇に入るとも、

終に光に導かでやは。』

### 人生の雪

彼の北極探檢に成功した勇敢なるナンセン博士は、恐らくは愛と雪とを對比した第一人者で有らう。彼の『極北』と題する著書は、汗牛充棟も昏ならざる群書を歴して、異彩を放つて居るものであるが、其の中に次のやうな一節がある。

「此の雪の無い氷野は、愛なき人生の如きものである。何等其を和らぐる物も無いのである。悪戦苦厄を表はさざるなき氷面の痕跡は、其が出来た時の儘に依然として續立して居て、突兀崔嵬、其の間を蛇行匍匐することも難い。愛は、人生の雪である。其は、戦鬪の形見である。深疵の中に、深く柔く降つて、雪其の物よりも白く又清い。愛なき人生は抑も何か。此の寒烈索寞崔嵬たる氷野の如きものである。風之を驅り、之を劈き、復た之を吹き寄するも、罅隙を蔽ふものなく、其の激烈なる衝撞を破るものなく、其の大浮氷の鋭角を圓からしむるもの無く、唯索寞崔嵬たる山の如き氷塊の外何物も無いのである。」此の如く簡單にして、而かも此の如く崇高なる詞藻に對しては、評註を施す可き餘地も無く、必要も無きことを斷つて置く。

### 先縦の力

世人が、若しも自分等の死後自分等の弱點なり痴愚なりが、如何に後輩の先例と爲り、其の把持襲用する所と爲るか、と云ふ事を知つてさへ居るならば、萬般の行爲に對して一層の用意を怠らないであらう。之を證するに足る事實は、世間に幾何も有らうが、次に擧ぐる者ほど顯著なるは蓋し滅多に無からうと思ふ。或るボストンの銘酒屋の主人が店先の窓際に酒徳利に取圍まれて居るダニエル・ウェブスターの半身像を据ゑ付けたことがある。斯廢風にして銘酒屋の主人は、街上を往來する青年輩の心中に、ダニエル・ウェブスターの如き人も、絶對に酒を禁じは爲なかつた時としては沈酔したときさへあると云ふ記憶を喚起せしめたのである。青年輩は、其のちびく酒を飲むと云ふ悪い方

面の先縦に倣はうとは欲しても、決してウエブスターの善い方面を學ばうと欲しない事は、確實である。心ある大方の君子よ、願はくば、此の銘酒屋の計畫に鑑みて、吾人が日々遺しつゝ有る先例に、一段の注意を拂ふやうに爲られんことを。

### 生中の死

インヂアナ州アンダーソンのコロンビア輪鐵製造所で、熔爐の若干を取壞に掛つた時、仕事師共が化學上の一大不可思議を發見した事がある。熔爐の大煙突の上を横断しようとする雀が、數々熱に打たれて死んだやうになつて落ちる。そして、大分澤山な雀が熔爐の中に落ちて来る。ところが、仕事師共が思ひも掛けず見付けた四羽の雀は、色も眼も羽も完全で、些の缺損したところがなく、宛然死んだばかりのやう

に見えて居た。けれども、觸つて見ると、完全に炭化して了つて燧石のやうに堅くなつて居た。そして、羽の尖端さへも、一寸も變化しては居なかつた。此の如き事實を起した化學上の條件は神秘である。要之、少許の真空が熔爐に出来ること云ふ事、及び雀が此の中に落ちて来て強度の熱に中つたので有ると云ふ事であつた。何にしる彼等雀は、幾月かの間、其處に落ちて居たのは、明々の事實であつた。

○余は精神的と云ふ相違こそあれ、同じ事情に在る男女を見來つたのである。時とする、世俗と云ふ激烈な熱が、人々の心を炭化して、燧石のやうに堅くして了ふやうである。彼等世の人々は、一見男であり又女である。けれど、彼等は實際炭化した守錢奴に過ぎないで、全く爐上の棚に置かれてある鐵製の玩具銀行のやうな物である。ソロモンは言つて居る。

『義によりて得たる所の僅少なる物は、不義によりて得たる多くの資財にまさる。』

### 悪魔の電線

ニュー・ジャーセイ州モリスタウンで、妙齡の貴婦人が、軽い電撃を受け得るか如何かを試さうと思つて、邸前の電柱に懸つて居る電線を握つた。すると片手は、忽ち強力な電流に吸ひ附けられて、之と同時に、電氣は身體中に亘つた。苦しくて悲鳴を揚げるなり、輾轉へつて倒れた。電線は離れないので、左の手を舉げて右の手を振り離さうと思つた。けれども、中々さうは行かないで、兩手共焦げ始めた。大人も子供も寄つては来たが、一人も其の貴婦人を助けてやらうと一臂を貸す者は無かつた。時に母親が飛び出して来た。

『おゝ、阿母助けて下さい。手が焼けます。』

と娘の叫びも耳に入らばこそ、突如娘の腰のあたりを抱へたが、棍棒の一撃に遭つたかのやうに、蜻蛉返りを打つて地に倒れた。最後に沈著のある一人の男が遣つて来て、斧で電線を切斷した。彼は、時を誤らず彼の女を救つたのであつた。けれど、彼の女は、恐ろしい程の火傷を受けたのである。

○此の出来事は、日々吾人の眼前で演せらるゝ悲劇を聯想せしむる。多くの世人は、罪に一寸手出を爲て、軽い電撃を感じて見たいなどと云ふ危険を冒し度があるのである。少年でありながら、直に其の神経を害する一杯の酒を飲んで見度がる。自ら害はれる事なく、何の邊まで不正不義に進むことが出来るだらう、などと自分の胸に問うて居る者も、多いので有る。其が、取りも直さず、悪魔が

男なり女なりを遠廻とほまはしに探す方法であるので有る。世人は電線を握とつて軽い電撃を得て、危険を一笑に附し去るので有る。が、他日地獄の火の通じて居る電線を握とつて、終に擲なり出されて死ぬるに至るのである。悪魔の電線には、一寸でも寄り付かない方が得まして有る。

### 好機を逸する勿れ

ニュー・ジャージー州のエリザベスで、一人の紳士が三歳ばかりの子供を連れて乗つて居た馬車の馬が、物におびえて駈け出したことがある。其まを停めようとして、却かつて紳士は擲なり出された。子供が一人で其の四輪馬車に残つて居ると、前の車輪が到頭電柱に衝突ぶつつた。其の時の激動で、馬は静止して了しまつたが、子供は、強弩から放たれたやうに、宙

に投げ出された。子供は、一軒の大きな藥種商店の窓から離るゝこと數呎に過ぎなかつたので、忽ち其の窓の方に眞直に飛ばされたのであつた。が、恰も好し、其の店の前に立つて居た男が、咄嗟に兩手を伸ばして受け止め、そして其の子の生命を救すつた。が、子供の投げ出された力が強かつたので、二人共窓に倒れ掛かつたけれども、幸に何れも怪我は爲しなかつたのである。

○人生の機會と云ふものは、大抵、善を爲し善を受くるの別なく、吾人に來ること、此の如きものである。若し其の機會を把握しようと思ふなら、恰も羽あつて飛ぶが如きものを捉へなければ爲ならない。機會の來るや、瞬時の蹶躅を許さないのであるから、平素から、好機を外はさす直に正しい決定を爲し得るやうな精神を以て、世に立たなければ爲らないのである。



## 最深の井戸

世界一の深い井戸は、ペンシルバニア州ピッツバーグの近くに掘られて居る。今でも一哩以上の深さに達して居て、其が落成の曉には、地下二哩に達する筈である。之を掘るのは、科學上の研究からで、斯くの如く深く掘って行くと、地球の内部は如何な物であらうか、其が決定せられる譯である。商業上の着眼點から言ふと、此の井戸は、ずっと以前に成功したので、地下彼是四五呎も掘り下げたかと思つた時、突然瓦斯と石油とが多量に出て來ることが分つたのである。けれど、此の營業會社は、之をば科學上の研究に提供しようとして決定して、コロンビア大學のウイリアム・ハロック教授を聘して、此の井戸の深くなるに従つて變じて來る溫度調査の表を作らうとしたのである。此の實驗に於て、特

に余をして興味を感せしめたのは、表面から近い部分で發見せられた瓦斯が、今穿孔用の大機關を運轉せしむる爲に用ひられて居る事である。諸君實に面白いでは無いか、斯くの如く、既に井の中から生ずる天然力は、更に之を深からしむる目的に利用せられて居るのである。

○此が吾等に、基督信徒たる者は、其の宗教上の經驗を、更に如何にして深からしむ可きかと云ふ其の眞の方法を暗示して居るやうに思へるのである。若し吾人が今までに享けた歡喜と愉快とを基督教の事業に傾注するならば、其の事業が益々擴張して優勢なるに至ることを發見する筈である。

## 溜池と清流

オハイオ州プシラス附近で、頗る奇妙な雷電の變態が起つたと云ふ

通信があつた。極々烈しい稻妻が其の地方の或る部分で旺んにやつて居る間に、或る邸宅に落ち、軒樋から水吐を傳つて溜池に及んだのである。其の水溜は、數日來の降雨で溢れんばかりであつた。處が、晚餐後、何を洗ふ爲に、溜池から水の來るやうに裝置けてある唧筒を幾何動かしても、厨屋の方に水が來なかつたので、抑も如何なる理由かと、溜池に行つて見ると、驚く可し、水は少しも無く、小さな青ばんだ孔が池の底に出來て居たのである。水は其處から出て行つたので、耳を欹てると、地下を流るゝ淙々たる聲が明瞭に聞えるのであつた。是れ明かに強力の電撃が池の底と地中を流れて居る小河との間を隔つる薄い地殻を貫いて了つたのである。

○如何な百姓でも、自分のうちの溜池を、其の様な清い水の絶えな  
い流と交易するを欲しないことがあらうか。是れ基督が、俗心の

人に向つて、其の時々の快樂富貴の小さい溜池を、永久不滅の歡喜  
平和に達するばかり高く噴き上ぐる泉と換へよ、と宣うた所以で  
ある。

### 人生の渦卷

ロックアウエーの荒濱で、二人の男が荒れ狂ふ浪の中に入らうと爲  
て居た。之を見た十五歳ばかりの少年は、海底の逆流に氣を附けるや  
うに注意した。けれども、二人は、他人の事は如何でも善いから自分の  
仕事を怠るな、と逆振を喰はして、少年の忠告を一笑に附した。二人が  
水中に入つてから五分も経たないうちに、一人の男のあたりに渦卷が  
有つて、忽ち卷込まれて了つた。で、今一人の方の男が、之を助けて遣ら  
うと思つて泳ぎ附いたが、彼も亦引込まれて了つた。是に、勇敢なる少

年の衷心の尊貴が發揮せられた。彼は二人を救はんが爲に、怒濤に身を投じて、生命を棄てたのである。

○是れ取りも直さず、基督が憐れむ可き罪人に向つて爲し給うた遺方である。彼等罪人は、基督の警戒に抗つて罪を犯したのである。けれども、基督は、彼等が殺さなければ已まない海底の逆流に捕へられて、破廉恥不道德の中に巻込まれた時でさへ、其の後に従ひ給うたのである。基督は、希望と慈惠との救命綱を携へて、彼等の處に泳ぎ出で給うたのである。吾人も、道を失へる者に向つては、之と同じ精神を持たなければ爲らないのである。

### 小 狐

オクラホマ・テリトリーのオクラホマ市附近の堀割が、妙な風に破壊

せられたことがある。初め公共的精神に富んでる資本家等が、北カナデア河の急流を引けば、オクラホマ市の堤防上に設置せらる可き總ての水車を運轉することが出来ると信じたので、技師を傭聘して測量を爲せた。其の結果に據ると、彎曲を爲して二十哩の距離を流れて居る其の河の水を引くには、僅々五哩の間を開鑿すれば可いと云ふことであつた。斯くて、幾千弗を費して其の堀割が著手せられたのである。水路は堤を以て圍ひ、蜿蜒たる彎曲を爲せる河は、二箇所も横斷せられた。其の竣工完成の祝賀は、實にオクラホマ市空前の大盛事であつた。水は大水門より滔々として入り來り、電燈會社の諸機械及び大規模の碎粉工場の水車は、魔術を掛けられたやうに廻轉し始めた。然るに、是に思ひも掛けず、形は小さいが驚く可く勤勉な敵が現はれて來て、此の企を忽ち滅茶滅茶に蹂躪して了つた。ゴフアールと呼ぶ鼠の一種が堤

防を攻撃したのである。もともと其の堀割の堤防は多孔性の破地であつて、此の動物の爲に穿たれた一個拳大に過ぎざる孔が、半時間も経たない中に廣がツて、裂罅を成し、水は、決河の勢恐ろしく、容易に砂堤を流して了つた。此の小さな動物に抗して戦ふことは、莫大な費用を要するので、到頭發起人等は、絶望して此の企業を中止して了つた。斯くて、此の堀割は終に過去の物となつたのである。

○何人も、小さな罪が暗黒裡に孔を穿つて、人生の河流を掘り覆へすことあるに意を用ひなければならぬ。葡萄を刳奪する者は、彼の「小狐」である。

### 逆立の珍木

米國ウイズコンシン州のミルウホトキト附近の果樹園に、頗る妙な

木が一株ある。と云ふのは、約四十年前に植ゑ附けられた林檎の古木で、枝幹は地中に、根帯は空中に出て居て、それで年に由つては果を結び、根のある可きところに枝を生じ、葉のある可き處に根を出して、今も見物人を驚かして居る。畢竟此の樹は、其の農夫が、獨逸の或る古傳説の中に、斯麼風の顛頭な木が本尊になつて居るのを見たか聞いたかして、一つ試しに行つて見ようと云ふので植ゑたのである。が、今も生きて居て、時折果實を結びはするもの、の要するに、變り物と云ふに過ぎないで、終ぞ果らしい果も附かないのである。

○基督信徒の生涯を送らうとして、基督教會の中に植ゑられもせず、又根帯を教會生活の責任におろさないで居る人々は、宛然此の逆立をして居る樹のやうな者である。眞に果實を結ぶ基督信徒は、主の花園に深く固く根をおろして居る者である。

## 富何かあらん

或る若い乾貨商會に勤めて居た書記が、遠い親類の者から大遺産を相續するやうになつた事がある。或る日、此の青年が商會主の私室に呼ばれて、辯護士から委細の報知を驚きながら聽いて居ると、商會主は微笑を湛へて、

『最早これからは、書記として勤めて呉れるやうな事は、とても望めまい、ね。君が居なくなると、大に困るよ。』

と言ふと、青年は昂然として、

『いや、御主人、御約束してあるだけの期間は、勿論居ります。私が幾何かの金銭を受けるやうになりましたと云ふだけで、約束を破るなどと云ふ事は、斷じて致しません。』

と言つたので、商會主と辯護士とは、互に顔を見合はした。相續するごとに爲つて居る金銭は、彼是三十萬弗であつたのである。辯護士は、顔に表はれる氣色を隠す爲に、口を撫でながら、

『では、君、明日の十時から四時までの間で、君の都合の好い時、一時間だけ潰して戴きたいです、君が書類を讀んだり署名したりする必要があるのですから。』

と言ふと、書記は、

『畏まりました。私は何時でも十一時四十五分に辨當を食べます。明日は、其の時間に御目にかゝると致しませう。朝飯をみっしり喰べて置きますと、六時までは立派にやれます。』

と答へた。

○何と道理の分つて居る青年では無いか。彼は、人たるの正道を

外れては居なかつたのである。重きを爲す所以のものは、吾人が持てる所のものでなくして、吾人が有る所のものである。要之、基督の宣へる、

『夫れ人の生命は所蓄の饒なるには因らざるなり。』  
と云ふ意味に過ぎないのである。

### 母國語の忘却

或る英國の博物學者が、先年發見せられてクリスマス島と命名せられたばかりの、南大西洋上の一孤島を探検したことが有る。無論人なり、獸類なりが棲んで居るとは、思つて居なかつたのである。然るに、博物學者は、島の中央部に大きな竹で造つた家が一軒あつて、其の周圍には耕作地があつて、何彼と栽培してあるのを見て驚いた。彼がおつび

らいた林間の空地に現はれると、一人の年取つた白人が、家の直側の木柵を出て、妻と子供等とを従へ、二十人ばかりの黒人の奴僕を殿にしなから、近寄つて來た。かくて、今様ロビンソンクルソーは、合圖で、本國の言語を忘れて了つたと言ふことを示し、そして、從者共の助に依つて、島から其の博物學者を追うた。其の白人は、何の方面から見ても、明かに土人の蠻性に全然退化して居たのである。

○此は、常に精神的に進む所のものの説明たるに過ぎないのである。基督信徒の家庭に養育せられ、基督信徒の歌を歌ふ可く教へられ、口常に天の言語に親しまされた人の多數が、遠く迷ひ出て罪に陥り、終に神の子として、其の國語を忘るゝに至つたのである。

### 火の心

是れまで專賣特許證の下附せられた器械中に、ダイト式興熱機と稱するものがある。此の器械は、寒氣の作用力を壓服して、如何なる互寒の季候にも堪へることを出來させると云ふ功能があるさうである。此の興熱機は、呼出する氣息から熱を保留して、之をして吸入氣を暖めさせ、そして肺に送り込むと云ふ仕掛で、普通では呼吸の爲に起る其の體熱の消散することを防止するのである。ダイト博士は、其の試験に於て、溫度零點下の冷蔵庫内に入つたのであるが、此の器械を用ふると、空氣が肺に達するまでには七十度乃至七十五度に昇つたのである。博士の説に據ると、北極圏内で普通の著込の儘で、優に斷えず溫暖なる空氣を供給することが出來るのであるから、北極探檢に携帯せられんことをも希望して居るのである。

○此の器械を使用するとして、實際上の効果が果して如何云ふも

のか、其は別問題として、心を天の愛に暖めて貰つて居る基督信徒は、其の靈魂の歡喜を誘起する神火を保有し得て、精神的暗夜の寒冷を感じるやうな事は、絶對的に無いことを、余は信じて疑はないのである。

#### 四海兄弟

サンフランシスコを發した南大西洋會社の急行列車が、ニューヨークレアンス附近に差掛つた時、寢臺車に乗込んで居た一人の病人が、死にさうになつて來た。汽車が愈、其處の停車場に著くと同時に、病人の徴候に激變が起つて、死期も近寄つて來たので、鐵道乗客掛は、暫く此の車臺を妨害しないやうに命令を發した。ところが、此の車内に乗り合はして居た一人の基督信徒は、一言の祈禱も爲すして、將に死なんとする

人を傍観するのは彼の爲にも善くないと言つて、寢用棚架の枕元に跪いた。斯くて、鐵道列車内などでは滅多に見られない光景が演ぜられた。一同は妙に感激して、覺えず、生と死との間に争ふ靈を載せて居る寢臺の周圍に跪いた。此の臨終の人の爲に捧げられた祈禱の言葉は、頗る美しい大に人の心を動かすに足るもので、其の精神は、概略次のやうなものであつた。此の人は、其の四周に跪いて居る人達には未知の人に違ひないけれども、一人の兄弟で、兄弟の愛と云ふ羈絆でお互に結び付けられて居るのである。と、斯う云ふ理由で、一同は互に相親しみて悲愁を分ち、又斯う云ふ理由で、最後の名残を惜む祈禱が、此の死なんとする兄弟の爲に捧げられたのである。此の神聖なる慈愛を乞ふ哀求が、終結に近づいた時、床邊に侍して居た一同は、擔夫に至るまで、異口同音に主の祈禱を繰り返した。

○徐々ではあるが確々と、基督は、全人類を兄弟たらしめ給ふのである。

## 天來の使命

ニューヨーク州のペンダントン附近に落ちた天來の賓客の爲に、學者達が大に困らされた事がある。と云ふのは、或る日朝早く歸宅しつゝあつた一紳士が、人目を眩するばかりの光芒を見て、おやと思ふ間もなく、一物體が彼の家の直側の地中に深く落込んだ。掘り出して見ると、強度の熱に熔かされた何だか他界のものらしい物質であつた。其がまだ熱かつたので、水に冷して切り開いて見ると、内部から、一片の金屬らしいものが現はれて、其の表面には、埃及の象形文字に若干似て居る不思議な記號が澤山爲てあつた。之を目撃した人々の中には、此



は他の遊星、恐らくは火星からの使命であらうとの説を主張した者も少く無かつた。

○此が果して他界から来た使命であるか無いかは、別問題として、吾人は神の大御心から來つた使命を聖典の中に有つて居るのである。そして、其の使命の吉報を、未だ之を知らない者等に傳ふるのは、吾人の光榮とする所の特權であるのである。

### 神聖美

大西洋岸なるモンテレーに在るポイント・バイナス燈臺の燈臺守は、婦人である。フィッシュ夫人が初めて此の燈臺に赴任して來た時は、棲むに堪へない荒涼な有様で、隣近所と云つても頗る遠くて、一望灰色の砂地たるに過ぎなかつた。で、夫人は、早速家庭らしい趣を呈せし

めやうと色々骨を折つて、内部には、暖かさうな掛布や、珍らしい陶器や、綺麗な備品を並べ、外面には、大きな花壇を區劃つて、爛漫馥郁たる場所たらしめ、其の周圍に、世界中何處にも見られない原産のサイプレスを植ゑ、此の日蔭をなす樹々の後に、廣い天鵝絨のやうな草地を造つて、テ・ローズ、牻牛兒苗、其の他香の好い花を植ゑ付けた。冬が終ると直に暖い太陽の美しう照り度る季節になるので、さうなると、海上僅に九十九呎なる此處一碧萬頃の大西洋を、一眸の中に收め得る此の花園は、最も美しい最も傳奇的な最も眺望の佳い名所の一つとなるのである。が、夫人が、何よりも細心管理する所のものは、自ら司つて居る彼の大光明である。一刻の遅速なく、燈光は、常に渺茫たる大海に其の光線を送ると共に、晝の彌強き光明の現はるゝと同時に消え去るのである。

○斯くの如き暗黒なる人生に處するには、心の花園に生ずる基

督教的慈愛をして、魂を沙漠中の沃地たらしむる外、他に道はないのである。

### 臨終の決算

少年時代及び青年時代には、吾人は皆相應な天真爛漫な希望と勇氣と各自獨特の天稟の才能とを賦與せられて居る。吾人は、一生の將に終らんとする時、今一度此の希望、勇氣、才能に面して、果して如何様に之を用ひ來つたか、決算を爲て見なければならぬのである。

ウエルシュ・チロルに、人を感動せしむるに足る詩的な一つの習慣が行はれて居る。と云ふのは、一人の年頃の少女が、將に結婚しようとして寺院に行かうと、父母の家の閨を跨がうとする其の瞬間に當つて、母なる人が嚴然として一枚の新しい手巾を與へる。花嫁は、結婚式の終

るまで之を手にして居て、涙を拭ふ。結婚の披露會などが済むと、新夫人は、直に此の手巾をリンネル入の中に仕舞ひ込む。そして、手巾は、其の婦人の存命中、其の中に入れられた儘である。何事何者が此の神聖な手巾を用ひさせやうとしても、チロルの婦人は、決して之を取出さない。で、此の手巾が取り出されて、第二回の即ち最後の役に立つのは、半世紀或は其の以上も経つてからの事である。其の夫人が、恐らくは白髮頭の祖母様になつて、此の世を去る時、肉親の者が此の花嫁の時に用ひたきりの手巾を死者の顔に掛ける。そして、一緒に墓に斂めるのである。

### 犬と豺

米國、ニュート・メキシコ州とアリゾナ州のデバシユ地方との境界あた

りの山谷には、豺が甚だ多い。此の獸は、狼と混性して、遂に半狼半犬の一新種屬を形づくるに至つたもので、家庭に飼育せられた犬の子孫であることは、明かである。頭や肩のあたりは、闘犬のやうで、體つきや運動の具合や性格などは、灰白色をして居る狼其の儘である。重量は百ポンド位もありさうで、色は灰白色で、處々に長い黒い毛が叢々に生えて居る。馬にでも乗つて通る人があると、何哩でも森林の間を従いて行く。此の振舞は、明かに家犬の本性の名残である。彼等豺は、如何かすると、人里遠き牧畜農場を訪れるが、其の時其の農場の犬が餘程主人に馴親んで居ないと、遂に豺と一緒に成つて行つて了ひ度がるのである。

○邪惡に惑はされ、公々然天をも畏れず、神をも敬はずして、今まで遣つて來た人で有りながら、屢神の家に出入し、又は、人情深い一寸した話を聞いたり、遠い過去になつて居る幼少の時を憧憬

追慕する歌を聽いたりして、心を動かすことが有るのは、世人も知悉して居ることでは有らう。是れ明かに罪の生活の爲に全然破滅されて居ない神聖なる面影の幾分が残つて居る證據である。

### 罪の火

ニュー・ヨーク市で、或る婦人が、午後八時一寸ばかり前に、自分の家の食堂で、お茶の支度を爲て居た。が、食堂と勝手との間の廊下に在る棚に用があつて、戸を開けると、忽ち一道の炎、焔紅蓮の舌を吐き出して、婦人の上衣を舐めた。年若い其の婦人が大聲を揚げて人を呼んだので、母親が勝手から飛んで來て、其の火を消す爲に、何かで身體を引包んで遣らうと爲るのに、度を失つて居た婦人は、痛みに堪へ兼ねて狂亂の餘

一六二  
り、支關を通りぬけて街上に飛び出した。通行人が大勢之を見付けて、助けて遣らうと思つて、色々にするけれど、亂心狂氣の婦人は、通行人などを突除け、跳除け寄せ付けないので、到頭非常な火傷をして、其の結果落命するに至つたのである。

○嗚呼、世間には、婦人にも男子にも、其の欲望情念を邪惡の火上に置いて居て、あはや身をも滅ぼして、了ひさうになつて居ながら、其の烈々たる炎を消して遣らうとする人を歡迎せざるのみか、自分を救つて呉れようとする恩人に對して抵抗する者が尠くない。罪ゆるゑの亂心狂氣より、恐る可き亂心狂氣は、無いのである。

### 没我の力

彼の禁酒同盟會の主唱者として、赫々たる盛名を歐米各國に轟かし

たウイラー、ド嬢が、シカゴ市に於て永眠した時、女史の身邊に捧げられた花の中に、ワシントンの一婦人記者の手向けた堇花の一束が有つた。此の婦人記者は、唯一度しかウイラー、ド嬢に會つたことは無かつたのである。初め此の婦人記者は、西方の一市に在つて、地方の一新聞の通信員を勤めて居たのであつた。が、頗る、轆轤落魄して、意氣揚がらず、過勞に加へて戀郷病に罹つて居たので、顔色蒼白、形容枯槁と云ふ有様であつた。彼の女は、齡猶ほ二十歳を出でざるに、早くも家山を出でて、他郷に客たる身とは爲つたのであるが、父母の許を離れて、猶ほ數箇月を出でなかつた時に、會、ウイラー、ド嬢は、其の西方の一市に、婦人基督教禁酒同盟會の支社を設立せんが爲に來つたのである。斯う云ふ譯で、此の年若い婦人記者は、何か緊要な事項を聞かぬが爲に、女史の止宿して居る旅館に派遣せられたのである。恰もウイラー、ド女史は、病中であ

ッた。けれども上るやうにとの旨を傳へさせた。年少き婦人記者が室に入ると、安樂椅子に身を沈めて居た女史は、顔色こそ甚しく蒼白であつたが、頗る懇懃であつた。記者が來意を告げると、女丈夫ウイラード嬢は、やをら身を起して、近寄りさま、兩手を婦人記者の肩に掛けて、「あらお嬢さん、何處かお悪くはありませんか。妾の椅子にお掛けなさい、嬢ちゃん。」と言つた。婦人記者は、女史の葬式に花を捧げた時、斯う述べたのである。

「そして妾——本統に誰も妾の事を「お嬢さん」と呼んで下さつた方は、久しく無かつたのであります。「嬢ちゃん」と呼んで下さつた方も、無かつたのであります。で妾は——本統に頭をフランセス・ウイラード女史の肩に中て、稍暫く其を叫んだのであります。妾は、其の前

にはお目に懸つたことも無かつたのであります。其の後にもお目に懸つたことは無かつたのであります。が、此の情籠れる數語を想起して、フランセス・ウイラード女史の上に神の恵あれと言ふのであります。」

○此の基督のやうな没我が、エスの弟子達をして、世の辛酸に倦める者及び將に倦まんとする者を慰撫し鼓舞せんとする念を強からしむる上に、與ふる力は、實に大なるものである。

### 近世文明の協力

或る學識の相應にある好事家が、晝餐を食ひに行つて、其の時食つた七十五仙の料理が實際幾何かゝるものだらうかと計算を行つて見た。先づ胡椒は一萬哩も離れた處から來る。樹は、八呎位の高さの小灌木

で、實を結ぶまでには、少くも五年はかゝる。實は、青いうちに摘まれて、日に乾かさねなければならぬ。此には傭女が要る。出來ると、船に積まれ、一千哩の鐵道で北米合衆國に送り附けられる。麵麩を製造する麥粉は、ダコタから來る。誰か土地を持つてゐる者が、麥を作るのであるから、投資を要する譯である。其の上に作男や作女に給金を拂はなければならぬ。麥粉は、又粉に挽かれなければならぬから、水車場の建築物も要るし、諸什器、諸器械も要る。これが若干の資金を投下した理窟になる。水車の粉挽も給料を貰ふ。桶匠も樽を造るので、支拂を受けるが、無論樽を造るに用ひらるゝ木は、切られ、鋸かれ、形相應にせられなければならぬ。是が亦澤山の人を使ふことになる。其から汽車に積み込まれて、鐵道の便を借りる。そして、復た馬車屋の手を煩はして、家まで運搬せられる。卓上の茶は、支那から、咖啡は、南米から來

る。鱈は、メイン州から持つて來られなければならない。此の魚を捕るにしても、人を使はなければならない。之を干し、之を荷作り、之を箱詰にするにも、多くの男や女が雇はれる。其の揚句が長い鐵道の便で送り越される。鹽は、ニューヨーク州北西部の印度人が貯藏したものが、遣つて來るのである。ケーキ中の香料は、インヂアンアーキペラゴのスパイス群島から來る。桃の罐詰はカリフォルニア州から來るが、これも資本及び勞力を要することである。斯くの如くして、此の熱心家は自分の食つた並の晝餐が、五〇〇〇〇〇〇〇弗の資本と五〇〇〇〇〇〇人の男女を要して居たことを發見した。

○やがては榮光燦として、天地に滿つる時が來て、基督教が全然到る處の人の心に透徹して、終に世界の男女と資本とが、皆各個人の至善至幸を作さんが爲に同心協力するに至るのであらう。

## 胡椒と忍耐

中世、歐羅巴では、胡椒と云ふものは、有らゆる樂味中最高最要のものであつた。ゼノア、ヴェニス、其の他中央歐羅巴の商業地である諸市府は、皆其の殷富の大部を胡椒貿易に依つて致したのである。當時に於ける胡椒の價は、法外に高く、埃及の支配者は、皆胡椒貿易に従事して居る者から大歳入を酷求した位である。此の胡椒が高價であると云ふ事が、葡萄牙人を激勵して、印度に到る航路を探索したので、恐らくは、此の考は、コロンブスの亞米利加發見當時、或る程度までは、彼の心にも有つたのである。兎に角、印度に到る航路が發見せられた後六年で、胡椒の價格に大暴落が起つた。今日では、胡椒は何處でも安過ぎる位である。

○人の性質でも、胡椒が利いて居ないと、弱くて味も無過ぎるが、胡椒が利き過ぎると、破壊を起す。忍耐強い人と云ふのは、其の組成中に何等藥味を含んで居ない人では無くて、自己の性質を克服し、強い自己修養の下に之を制遏する人を謂ふのである。

## 天の鍊金家

基督は、今も塵の世の情念痴愚の埃を變じて、智慧の黄金と爲すのであると云ふ思想は、ホイッチアアの妙想たるを失はない。次に擧ぐるが如き詩句は、他に殆んど類を見ざるぐらゐる高遠なもので有る。

『知らず、盲ひて、慰めもなく、』

世は、基督の脚下に坐す。

されど、君の袍衣の襪に觸れて、

天の鍊金家が其の世の塵を  
黄金と變ふるを感ず可きかな。

### 浮浪人の訓言

一人の憐れむ可き老いたる浮浪人の、襤褸に身を包み、梳らない頭髪は蓬のやうなのが、ニュー・オルレアンスのとある金碧燦爛たる酒亭の、破璃窓を透して中の方を窺ひながら佇んで居た。二人の風流公子が彼を認めて、一人が他の一人に向つて、

『請ふ吾人をして彼の好漢サマリタンを演せしめ、ホボを拉し來つて一杯を與へしめよ。』

と言ふと、他の一人は、欣然として之に賛成した。で、浮浪人は、無様な風をして歩きながら、入り來つて風流公子の足下に坐した。彼が打ち顛

ふ片手で盃に酒を酌ぐと、公子の一人は、

『吾人をして一場の演説を試みしめよ。』

と言つたので、浮浪者は満を引いて一息に飲み干すと齊しく、身をつと起して、二人の前に立つた。襤褸を纏ひ、塵埃に塗れてこそ居たが、其の威嚴と雅致とは掩ひ隠さる可くも無かつた。彼曰く、

『紳士諸君、余は、今夜、つくづく諸君並に余自らを見ました。ところが、余は、余の失はれた壯年時代の繪を眺めて居るが如く感ずるのであります。此の腫起んで居る顔容も、嘗ては諸君の其の如く、若やかで美しかつたのであります。此の蹣跚する身體も、嘗ては諸君の如く昂然として歩み、人の世の人たるに恥ぢなかつたのであります。余も、亦嘗ては家庭や朋友や地位や皆之を有つて居ました。美術家の夢よりも美しい妻をも有つて居ました。が、余は、其の名譽及び尊敬の



眞珠、千萬の黄金を積むとも買ふことの出来ない其の眞珠を酒盃の中に落したのであります。春の花よりも妙に愛らしい子供をも有つて居ました。が余は、晝夜の分ちなく酒氣を帯びて居ないことのない父親が凋萎せよと呪ふ詛の下に、彼等の色褪せて遂に枯れ果つるを見たのであります。今日に在りては、余は、妻なき夫、子なき父、余がものと呼ぶ可き家もなき浮浪人となり、有らゆる善の動機は一つも残つて居ない、——何も彼も悉く飲酒と云ふ旋渦に呑み去られた人と爲つたのであります。』

浮浪人は、演説を止めた。酒盃は、彼の無神経な指をこぼれ、床上千百の断片となつて顛いた。忽ち、前後に搖いで居た戸が、さと開いて復た閉ぢると齊しく、彼は去つて行つたのである。

○願はくは、一杯の酒を屬せらるゝ青年あらば、此の浮浪人の訓言を想ひ起せよ。

### 心の開拓

露西亞皇帝の一所有地は、其の大きき全英倫の三倍もある。ところが、近來の財政雜誌に記載せられた所に據ると、倫敦の一エーカーは、露西亞荒原の幾百萬エーカーよりも、多くの價値があると云ふことである。露帝の大所有地は、一年僅に四十七萬五千弗の歳入を齎らすに過ぎない。けれども、倫敦の一エーカーは、實に一年六十萬弗以上の歳入の基を爲すのである。

○心の開拓も、亦此の如きものである。人の魂は、忍耐、平和、愛情、希望、忠信、温順等の美玉で富ますことが出来る。吾等の心は、之を富ましさへすれば、愉快及び慈惠と云ふ無限の歳入を給し得るやう。

に爲ることが出来るに拘らず、何故に空しく不毛の荒原たるに任して置くのであるか。

### 雲雀の歌

ジョン・パロース氏の語ったことである。十何年かの昔、英國の一友人が氏の許に二十羽の雲雀を籠に入れて送って越した。で、氏は、其の雲雀を住居の近くの野に放って遣った。すると、雲雀は、風に吹き送られて雲外に去って了って、爾來再び其の聲を聞くことも出来ず、其の姿を見ることも出来なかつたのである。然るに、或る日曜日のこと、遠くもない市から訪問して来た一蘇格蘭人が、さも感に堪へないと云ふ顔付をして、途中雲雀の聲を聞いた事を語り出した。決して彼は夢を見たのでは無かつた。彼は、雲雀が如何なる鳥であるかをも知って居た。

のである。二十五年かそれとももっと以前に、ツーン河の沿岸を去って以來未だ嘗て雲雀の啼くを聞いたことが無かつたと云ふことを語った。思ふに、雲雀の歌は、彼に、それが博物學者に與へるよりも、更に深い感興を與へたのである。

大分以前のこと、ロングアイランドで、雲雀が放たれてより、段々繁殖して、今では地方に依ると、其の聲を聞くことが度々ある。或る夏の日、鳥好きの一人が、雲雀を観察せんが爲に、市府から態々遣って来た。偶一羽の雲雀が、其の頭上に當って、大空高く歌って居た。折柄一人の愛爾蘭人が通り掛つたが、恰も其の場所に釘づけにでもせられたやうに、忽ち歩を停めた。半ば歡び半ば疑うて居るらしい様子が、其の顔色に現はれた。眞に彼は、青年の昔に復って雲雀を聽いて居たのであつた。彼は、帽を脱ぎ、空を仰いで、唇を動かしながら、眼を放って長い間雲雀の

後を追ひつゝ立ッて居た。

自然の研究者は考へた『あゝ、吾も彼の人の耳を以て彼の歌を聞き得たらば……』と學者に取ッては、雲雀も歌も單に批評的に他の幾十の小禽と比較せらるべき鳥の聲に過ぎないのであつた。が、今一人の人に取ッては、其の聲は彼の青春時彼が故國の山丘に遊んだ遠き昔を殘らず齎らしたのであつた。

○之と同じ様な差異は、聖典を哲學的精神を以て研究する人と、聖典の中に天國の永世の歌を聞く人との間にある。前者の態度は、冷かで批評的、後者は、恰も聖調に耳を傾くるが如く、恍惚として、心愛の中に融け去ッて流れ行くを覺えるのである。

### 鰻と列車

デラウエアー、ラックアワソナ鐵道の一最急行列車が、或る晩、妙な風に進行を阻碍せられた事があつた。火夫は、蒸氣の流通が出来なくなッて居たことを發見した。よくよく檢へて見ると、極々少量の水しか給水管から來なかつたのである。で、列車を停めて、更に吟味して見たところが、一尾の大鰻が管中に居ることが分明した。其の鰻奴さん、生きて居てぬらりくらりとして居た。が、機關師は、直ちに其の鰻を取り出して、汽車遲著の原因を陳述する時の證據として持つて行ッた。思ふに、鰻は、其の極めて小さかつた時、水槽の中に吸ひ上げられた者であつたらう。

○人世の救済を爲さんが爲めの正義の列車が、幾度となく、之と等しき無意味な原因に依ッて、停止せらるゝことがある。吾人は、小事物が能く吾人の靈魂の力を供給する道を塞ぐことあるを忘れ

てはならない。靈魂の給水管中に利己と云ふぬらりくらの鰻を住ませてはならないのである。

### 情 熱

約三十五年の昔、オンタリオ州に住んで居た或る農夫の妻が、逃げ牛を探さんが爲に森林に入り込んだところが、喉が渴いてならぬので、水を飲まうと思つて、泉に身を偃めた。すると、如何した拍子か一塊の緩い岩に躓いた。其の岩は足下に轉じて來た。後に調べて見ると、其の岩と云ふのが二十ポンドの重量ある純金と言つても善い位の金塊であつたのである。此の偶然の發見があつて、忽ち六箇月を出でない中に、五千の住民を有する一都邑が出來ると云ふ結果を生じた。そして、其の附近に純白大理石の廣大な石切り場が發見せられたので、其の一市

は、殆んど全體大理石で建築せられた。これがブリツヂウオーター市であつて、實に旅館も、寺院も、學校も、裁判所も、住宅の最大多數も、悉く大理石で築造せられた世界唯一の市邑である。然るに、奇なるかな、多額の金錢を投じて探索を爲したに拘らず、此の地方から僅少の金だに出なかつたので、住民忽ちに減じて、蕭條を極むるに至つたのである。

○嗚呼、世俗の情熱と云ふものは、甚だ之に類して居るのである。吾人の中、何人か、過去を顧みて道に當れる幾多寂寥の村驛を見ざる者があらう。吾人も、嘗ては何處かで金塊、若しくは黄金であらうと思へる物を發見して、一時身命を之に没入して、空しく絶望した事が有る。そして、吾人の生涯に於て最富の發見らしく思へたものが、徒に落窶たる熱情として記憶に存するに過ぎないのである。思へ、人生唯一つの金坑の大なるものがある。終生働いて勇